

平安京左京八条三坊一町跡・
東本願寺前古墓群

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一九―二〇

平安京左京八条三坊一町跡・東本願寺前古墓群

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条三坊一町跡・
東本願寺前古墓群

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、ホテル建設工事に伴う平安京跡・東本願寺前古墓群の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和2年4月

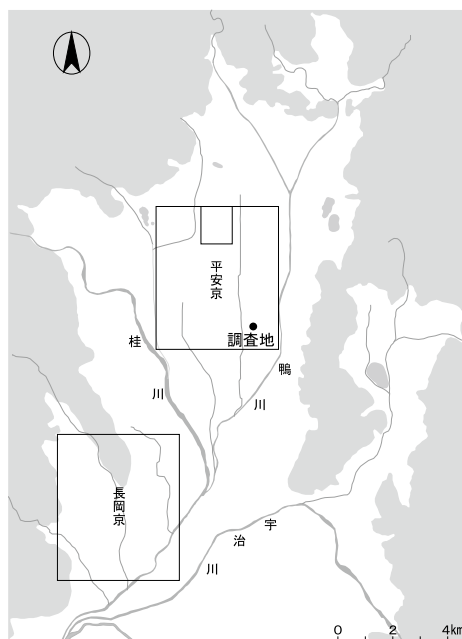
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・東本願寺前古墓群（京都市番号 18H064）
- 2 調査所在地 京都市下京区木津屋橋通新町西入東塩小路町601・592・592-1・726-1
- 3 委 託 者 株式会社島田組 代表取締役社長 岩立二郎
- 4 調査期間 2019年6月3日～2019年8月28日
- 5 調査面積 294㎡
- 6 調査担当者 鈴木康高
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 鈴木康高
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・整理作業にあたっては下記の方々からご教示頂いた。記して謝意を表します。（五十音順、敬称略）
網 伸也、馬田綾子、西山良平、吉野秋二

（調査地点図）



目 次

| | |
|-----------------------|----|
| 1. 調査経過 | 1 |
| (1) 調査に至る経緯 | 1 |
| (2) 調査の経過 | 1 |
| 2. 位置と環境 | 3 |
| (1) 歴史的環境と立地 | 3 |
| (2) 既往の調査 | 3 |
| 3. 遺 構 | 5 |
| (1) 基本層序 | 5 |
| (2) 平安時代中期以前の遺構 | 5 |
| (3) 平安時代後期から鎌倉時代中期の遺構 | 6 |
| (4) 鎌倉時代後期から室町時代前期の遺構 | 9 |
| 4. 遺 物 | 12 |
| (1) 遺物の概要 | 12 |
| (2) 土器類 | 12 |
| (3) 瓦類 | 19 |
| (4) 土製品 | 20 |
| (5) 石製品 | 20 |
| (6) 金属製品 | 21 |
| 5. ま と め | 23 |

図 版 目 次

- 図版 1 遺構 第 2 面遺構平面図 (1 : 100)
- 図版 2 遺構 第 1 面遺構平面図 (1 : 100)
- 図版 3 遺構 調査区西壁・南壁断面図 (1 : 100)
- 図版 4 遺構 井戸 91・458・479・488 実測図 (1 : 40)
- 図版 5 遺構 井戸 4・422 実測図 (1 : 40)
- 図版 6 遺構 井戸 160・253・379・420 実測図 (1 : 40)
- 図版 7 遺構 室 1、タタキ 6、井戸 149、土坑 323・324・377・378 実測図 (1 : 50、井戸 149
のみ 1 : 40)
- 図版 8 遺構 柵 1～5 実測図 (1 : 80)
- 図版 9 遺構 1 調査区北部 第 2 面全景 (西から)
2 調査区南部 第 2 面全景 (西から)
- 図版 10 遺構 1 井戸 488 (南から)
2 井戸 479 (北から)
3 湿地 477 (南西から)
- 図版 11 遺構 1 調査区北部 第 1 面全景 (西から)
2 調査区南部 第 1 面全景 (西から)
- 図版 12 遺構 1 井戸 458 (西から)
2 井戸 91 (北から)
3 井戸 253 (北から)
- 図版 13 遺構 1 井戸 160 (北から)
2 井戸 420 (北から)
3 井戸 379 (東から)
4 土坑 400 遺物出土状況 (南東から)
- 図版 14 遺構 1 建物 1 (東から)
2 建物 1 柱穴 224 (東から)
3 建物 1 柱穴 47 (北から)
- 図版 15 遺構 1 室 1 (北から)
2 土坑 377・378 (東から)
3 土坑 324 (北から)
- 図版 16 遺物 湿地 477、井戸 422・458・488、土坑 400 出土土器
- 図版 17 遺物 土坑 392、室 1、井戸 399 出土土器

挿 図 目 次

| | | |
|-----|--|----|
| 図1 | 調査地位置図及び周辺調査位置図（1：2,500） | 1 |
| 図2 | 調査前全景（北西から） | 2 |
| 図3 | 作業状況（南東から） | 2 |
| 図4 | 調査区配置図（1：500） | 2 |
| 図5 | 湿地477断面図（1：40） | 6 |
| 図6 | 土坑387・392・400実測図（1：50） | 8 |
| 図7 | 建物1実測図（1：60） | 9 |
| 図8 | 湿地477、井戸479・488、その他の遺構出土土器実測図（1：4） | 13 |
| 図9 | 井戸160・419・422・458、溝453、土坑400・454・柱穴320出土土器実測図（1：4） | 14 |
| 図10 | 土坑3・392、井戸253出土土器実測図（1：4） | 16 |
| 図11 | 室1、井戸149・399、土坑173出土土器実測図（1：4） | 18 |
| 図12 | 土坑387出土土器実測図（1：8） | 19 |
| 図13 | 瓦類拓影及び実測図（1：4） | 20 |
| 図14 | 土製品実測図（1：4） | 20 |
| 図15 | 石製品実測図（1：4） | 21 |
| 図16 | 金属製品拓影及び実測図（1：2、金5のみ1：4） | 22 |
| 図17 | 一町内における調査区の位置（1：800） | 23 |
| 図18 | 主要遺構変遷図（1：250） | 24 |

表 目 次

| | | |
|----|-------|----|
| 表1 | 遺構概要表 | 5 |
| 表2 | 遺物概要表 | 12 |

平安京左京八条三坊一町跡・東本願寺前古墓群

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯 (図1)

本調査は、ホテル建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地点は、平安京左京八条三坊一町跡及び中世を中心とした墓地である東本願寺前古墓群にあたる。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）による試掘調査が行われ、平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物が確認されたため、文化財保護課から原因者に対し発掘調査が必要であるとの指導がなされた。調査は原因者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。

(2) 調査の経過 (図2～4)

調査は2019年6月3日に開始した。排土置き場を確保するため調査区を2分割し、南側の1区から調査を開始し、続いて北側の2区の調査を行った。調査面積は294㎡である。

調査では、現代盛土から近世耕作土までを重機により掘削し、地表下約1.8mで平安時代中期の

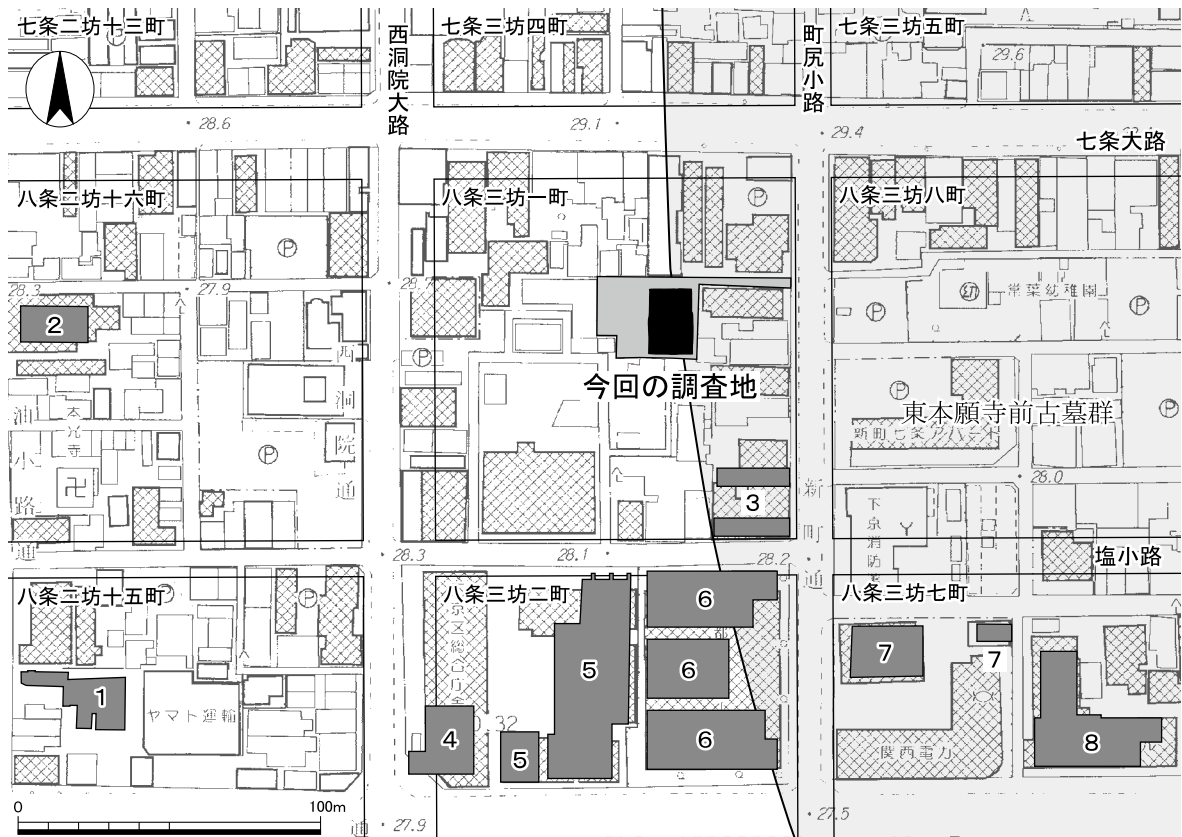


図1 調査地位置図及び周辺調査位置図 (1 : 2500)



図2 調査前全景（北西から）



図3 作業状況（南東から）

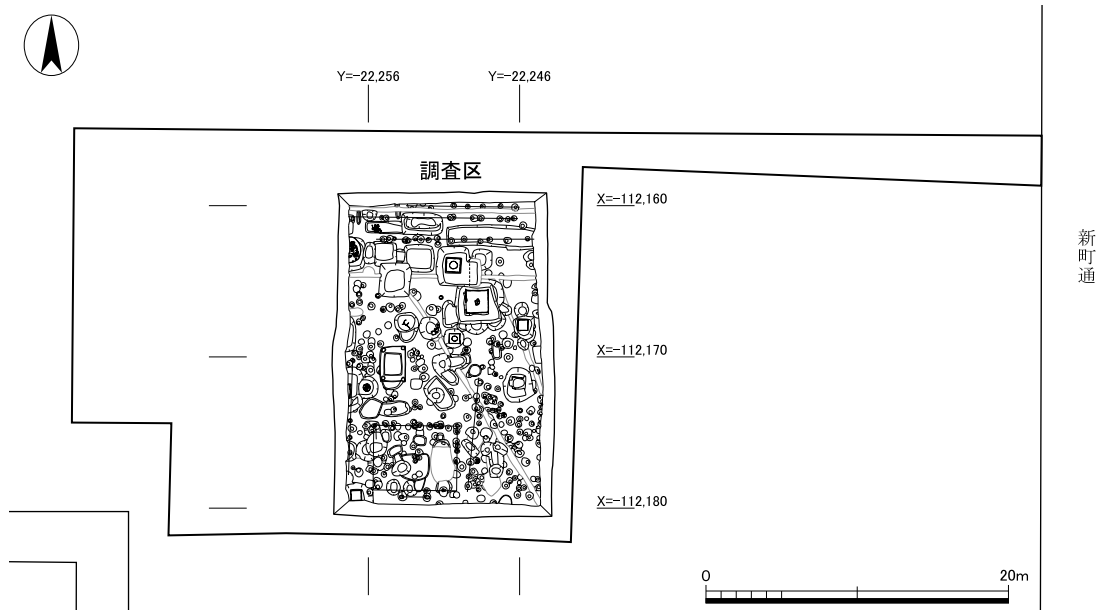


図4 調査区配置図（1：500）

整地層を検出した。この上面を第1面として調査を行い、建物・井戸・柵・溝・土坑・多数の柱穴などを検出した。第1面の調査終了後、整地層を掘削し、地山上面を第2面として調査を行い、平安時代中期に埋まる湿地状堆積や井戸を検出した。検出遺構は人力で掘削し、図面作成・写真撮影などの記録作業を行った。調査後は埋め戻しを行い、8月28日にすべての作業を終了した。

調査中は、適宜、文化財保護課による臨検を受けた。また、検証委員である龍谷大学の國下多美樹教授と立命館大学の木立雅朗教授による検証を受けた。

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地点は、平安京左京八条三坊一町の中央部にあたり、北を七条大路、東を町尻小路、南を塩小路、西を西洞院大路に囲まれる。また、東本願寺前古墓群の西端に位置する。

当町に関連する史料から、平安時代中期の永保元年（1081）、源経信が七条大路に棧敷を設けて稲荷祭を見物している¹⁾ことや、平安時代後期にこの町の東端に経師が住んでいる²⁾ことが窺える。

調査地西側と南西側の左京八条二坊十五・十六町では、寛喜3年（1231）の塩小路西洞院付近の焼失³⁾や天福2年（1234）にもこの一帯が焼亡した⁴⁾ことがわかる。調査区北東側の左京七条三坊五町には、左大弁藤原実政の領地である荒畠があり、永保元年（1081）の稲荷祭の日に、この荒畠で一人の童子が殺害されたが、その遺体には不思議にも傷がなかった。この際、左近大夫高階能遠の家の雑色が参考人として検非違使の取り調べを受けたことが記されており⁵⁾、七条大路に面した街区でも宅地として利用されていなかったところもあることがわかる。

調査地北東の七条大路と町尻小路の交差点付近は、平安時代後期からの商工業地である七条町が形成され、鏡や刀装具・仏具といった铸造品などの一大生産地になったと考えられている。周辺の発掘調査でも铸造品などの生産に関わる遺構・遺物が多く確認され、この地域を特徴づけている。

(2) 既往の調査（図1）

調査地が位置する京都駅周辺は、平安京域内において一定範囲で多数の調査が行われ、遺跡の様相が把握できる貴重な地域である。平安時代前期から中期にかけては自然流路や落込みなどが多くの地点で見つかり、土地利用は低調であったようである。確認数は少ないが、園池などの存在から、宅地として利用されていたところも見られる。平安時代後期になると徐々に遺構・遺物の検出例が増加し、鎌倉時代から室町時代にかけて最盛期を迎える。京都駅北側には、七条町・八条院町が位置すると考えられており、それに関連して铸造・漆器生産などの手工業生産にかかわる調査成果が多数ある。特に铸造関連遺構・遺物の検出例は多く、この地域を特徴づけるものとして評価されている。

平安時代中期以前の遺構には、調査1で柵・土坑、調査8で井戸・土坑などが見つかり、その分布は希薄である。この他に調査1・3・5・6・8で流路、調査2で池状の落込みが検出されていることから、中小規模の流路が複数流下する様子であったことが想定され、土地利用がされにくい環境にあったことがわかる。

平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての遺構は、全ての調査地で井戸・土坑・柱穴などが多数検出され、铸造に関連した遺物が出土している。特に調査1では、油小路に面した宅地の構造や铸造関連遺構・遺物の様相が良くわかる。

鎌倉時代後半から室町時代になっても、遺構・遺物の様相は鎌倉時代を踏襲するが、調査3や7では土壇墓が検出され、墓地として利用されるようになる。調査4では詳細な時期は不明だが、鎌倉時代から室町時代にかけての井戸が5基検出されている。このうちのSE2は井戸枠が横板横棧組で、その内法は東西3.3m、南北3.6mと規模が大きく、構造も特徴的である。

調査4では、江戸時代の西洞院川が検出されている。

註

1) 『帥記』永保元年四月十日条

2) 『白氏詩卷』極書

『白氏詩卷』は、中国・唐時代の詩人白居易の『白氏文集』の中の8篇の詩を藤原行成が寛仁2年(1018)に書写したものである。その巻末に、藤原行成自身の奥書と後に藤原定信が保延6年(1140)これを購入したと記す跋がある。跋に経師が住んでいた場所が記されている。「件女人宅、自鹽小路北、自町尻西、町尻面之辻内、有在俗経師云々、件経師之妻也。」

3) 『民経記』寛喜3年6月3日条

4) 『明月記』天福2年八月五日条

5) 『帥記』永保元年四月十五日条

周辺調査報告一覧

調査1 『平安京左京八条二坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-17 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年

調査2 「平安京左京八条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年

調査3 「平安京左京八条三坊一町」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

調査4 「平安京左京八条三坊二町2」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

調査5 『平安京左京八条三坊二町-第2次調査-』財団法人古代学協会 1985年

調査6 『平安京左京八条三坊二町』財団法人古代学協会 1983年

調査7 『平安京左京八条三坊七町』財団法人京都文化財団 1988年

調査8 『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図版3)

基本層序は、現地表面から現代盛土、近世末から近現代にかけての盛土、近世耕作土、鎌倉時代末から室町時代初頭にかけての整地層、平安時代中期の整地層、地山である。

調査区全体に、現代盛土(図版3-西壁1層)が0.7~1.0mの厚さで堆積し、この下層には近世末から近現代初頭にかけての盛土(図版3-西壁2層)が1.0m程度の厚さで堆積する。この整地層は、調査区北壁で東から西に向かって堆積し、作業が東側から行われたことがわかる。整地層には、禁門の変に伴う大火で焼けたと考えられる瓦や焼土を含むところもある。この下には近世耕作土(図版3-西壁4層)が0.1~0.2mの厚さで堆積し、この近世耕作土を除去すると鎌倉時代末から室町時代にかけての黒褐色砂泥の整地層(図版3-西壁6層)となる。厚さは3cmと非常に薄く、上面は後世に削平されていると考えられる。この整地層の下には、平安時代中期の暗灰黄色砂泥の整地層(図版3-西壁25層)が0.2~0.4mの厚さで堆積する。この上面を第1面として調査を行った。整地層を除去すると地山となり、この上面を第2面とした。

(2) 平安時代中期以前の遺構 (図版1・9)

この時期の遺構は、第2面で井戸・溝・湿地などを検出した。これ以外に明瞭な遺構は検出できなかった。

井戸479(図版4・10) 調査区中央部で検出した。掘形の平面形は南北1.7m、東西1.5mの楕円形である。検出面から底部までの深さは0.2mで、底部の標高は26.0mである。上部の構造は不明であるが、底部に曲物が据えられる。曲物は南北0.5m、東西0.35mの楕円形で、高さ0.1mが残存する。曲物の遺存状態は不良で、わずかにその痕跡がみられる。遺物は、曲物内埋土から京都Ⅲ期の土器類が出土した。出土土器には墨痕が見られる。

井戸488(図版4・10) 調査区北東部で検出した。掘形の平面形は円形で、規模は直径0.6mである。検出面から底部までの深さは0.25mで、底部の標高は26.05mである。上部の構造は不明であるが、底部に曲物が据えられる。曲物は直径0.35mの円形で、高さ0.1mが残存する。曲物の遺

表1 遺構概要表

| 時 代 | 遺 構 | 備 考 |
|-------------------|---|-----|
| 平安時代中期以前 | 井戸479・488、溝384、湿地477 | 第2面 |
| 平安時代後期 ~鎌倉時代中期 | 井戸4・91・160・253・379・419・420・422・440・458、 溝453、土坑3・387・392・400・454 | 第1面 |
| 鎌倉時代後期 ~室町時代前期 | 建物1、室1、タタキ6、井戸149・399、 柵1・2・5、土坑173・323・324・325・377・378 | 第1面 |

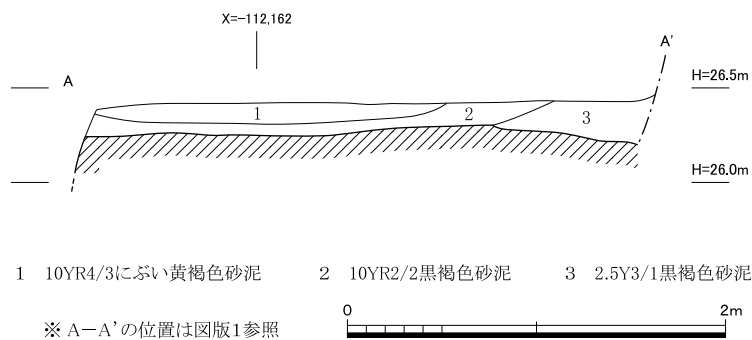


図5 湿地477断面図（1：40）

存状態は不良で、わずかにその痕跡がみられる。遺物は、曲物内埋土から京都Ⅲ期の土器類が出土した。出土土器には墨痕が見られる。

溝384 調査区東部で検出した南北方向の溝で、北側は調査区外に広がる。検出長15.5m、幅

0.6～1.3m、深さ0.1～0.2mである。遺物は出土しなかった。

湿地477（図5、図版10） 調査区北部で検出した。北側と西側は調査区外に広がる。南東部は後世の井戸422などによって掘り込まれる。規模は南北3.5m以上、東西9.1m以上、深さ0.2mである。埋土は黒褐色砂泥が主体的で、粘性が強い。遺物は、京都Ⅲ期古段階の土器類が出土量の大半を占め、京都Ⅱ期の土器類がわずかに含まれる。

（3）平安時代後期から鎌倉時代中期の遺構（図版2・11）

この時期の遺構は、第1面で井戸・柵・溝・土坑・多数の柱穴などを検出した。

井戸91（図版4・12） 調査区中央西部で検出した。西側は井戸4によって掘り込まれるが、掘形の平面形は直径1.5mの円形に復元できる。検出面から底部までの深さは0.9mで、底部の標高は25.75mである。上部の構造は不明であるが、底部に曲物が据えられる。曲物は直径0.5mの円形で、高さ0.35mが残存する。曲物の遺存状態は不良で、わずかにその痕跡がみられる。掘形内からは、径0.5m程度の石が5点出土しており、うち1点を残して図化している。井戸枠に使用していた石材を、井戸じまいの際に落とし込んだものとも考えられる。遺物は、京都Ⅵ期の土器類が出土した。

井戸458（図版4・12） 調査区中央部で検出した。掘形の平面形は台形で、規模は南北2.7m、東西3.1mである。検出面から底部までの深さは0.9mで、底部の標高は25.6mである。井戸枠は方形横板蒸籠組で、底部に水溜はみられない。井戸枠の規模は内法で一辺約1.45m、高さ0.4mが残存する。井戸枠は、北側と南側の横板の端部を凸字状、東側と西側の横板の端部を凹字状に加工し、それぞれを組み合わせて構築していた。井戸底の中央部からは長軸0.5m程度の石材が出土した。枠材の遺存状態はやや不良である。枠材に使用された樹種はヒノキ科と考えられる。遺物は、京都Ⅴ期古～中段階の土器類が出土した。

井戸422（図版5） 調査区中央北部で検出した。東側は試掘坑によって掘り込まれるが、掘形の平面形は南北2.6m、東西2.3mの長方形に復元できる。検出面から底部までの深さは1.1mで、底部の標高は25.4mである。井戸枠は横棧部と底部の水溜が残るのみで、上部構造は不明である。井戸枠の規模は内法で一辺約0.9mである。水溜には直径0.5mの円形の曲物が据えられる。枠材の遺存状態は不良である。遺物は、京都Ⅵ期中段階の土器類が出土した。出土土器には「□散」と墨書

された白色土器が出土している。

井戸 4 (図版 5) 調査区中央部西壁際で検出した。西側は調査区外に広がるため、掘形の規模は不明である。検出面から底部までの深さは1.1mで、底部の標高は25.5mである。井戸枠は方形縦板横棧組である。水溜の有無は調査区外のため不明である。井戸枠の規模は内法で一辺約1.0mに復元できる。横棧は縦板下端部とその上方約0.3mの2箇所に残っていた。枠材の遺存状態はやや不良である。遺物は、京都VI期新段階の土器類が出土した。

井戸 253 (図版 6・12) 調査区中央部で検出した。掘形の平面形は円形で、規模は径約1.3mである。検出面から底部までの深さは0.7mで、底部の標高は約25.65mである。井戸枠は横棧部と底部の水溜が残るのみで、上部構造は不明である。井戸枠の規模は内法で南北0.6m、東西0.7mの方形である。水溜には直径0.35mの円形の曲物が据えられる。枠材の遺存状態は不良である。遺物は、京都VI期新段階の土器類が出土した。

井戸 160 (図版 6・13) 調査区中央東部で検出した。掘形の平面形は不正方形で、規模は南北1.6m、東西1.4mである。底部に水溜は見られない。検出面から底部までの深さは0.7mで、底部の標高は25.85mである。井戸枠は方形縦板横棧組である。井戸枠の規模は内法で一辺約0.65mである。縦板には幅0.1m程度の板材を用いる。横棧は縦板下端部のみが残る。枠材の遺存状態は不良である。遺物は、京都VI期中～新段階の土器類が出土した。

井戸 419 調査区中央部で検出した。掘形の平面形は方形で、規模は一辺1.5mで、検出面から底部までの深さは0.6mで、底部の標高は25.9mである。井戸枠は残存していなかった。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は、京都VI期中～新段階の土器類が出土した。

井戸 379 (図版 6・13) 調査区南西部壁際で検出した。南側と西側は調査区外に広がるため、掘形の規模は不明である。検出面から底部までの深さは1.0mで、底部の標高は25.4mである。井戸枠は横棧部と底部の水溜が残るのみで、上部構造は不明である。井戸枠の規模は内法で一辺約0.75mである。枠材の遺存状態はやや不良である。遺物は、京都VI期新段階の土器類が出土した。

井戸 420 (図版 6・13) 調査区中央部で検出した。掘形の平面形は円形で、規模は直径1.5mである。検出面から底部までの深さは0.45mで、底部の標高は25.9mである。掘形底部の南東部には人頭大の石材が円弧を描くように3石据えられるが、本来は円形に廻っていた石材が抜き取られた結果と見られる。石材の内法は直径0.5m程度に復元できる。遺物は、京都VI期新段階の土器類が出土した。

井戸 440 (図版 2) 調査区北部の西壁際で検出した。西半部が調査区外となり、全体の規模は不明である。掘形の平面形は方形で、南北長が2.2m、東西長が0.9m以上、検出面から底部までの深さは1.2mで、底部の標高は25.4mである。井戸枠は残っていなかった。遺物は、京都VI期の土器類の小片が出土した。

柵 3 (図版 8) 調査区北部で検出した東西方向の柵である。方位はほぼ正方位。溝453埋没後、同じ位置に作られる。検出長は約9.5mである。多数の柱穴が重複することから複数回の修復が行われたようである。規模は5間、柱間は1.2～1.5m程度の不等間に復元できる。柱穴の掘形は直径

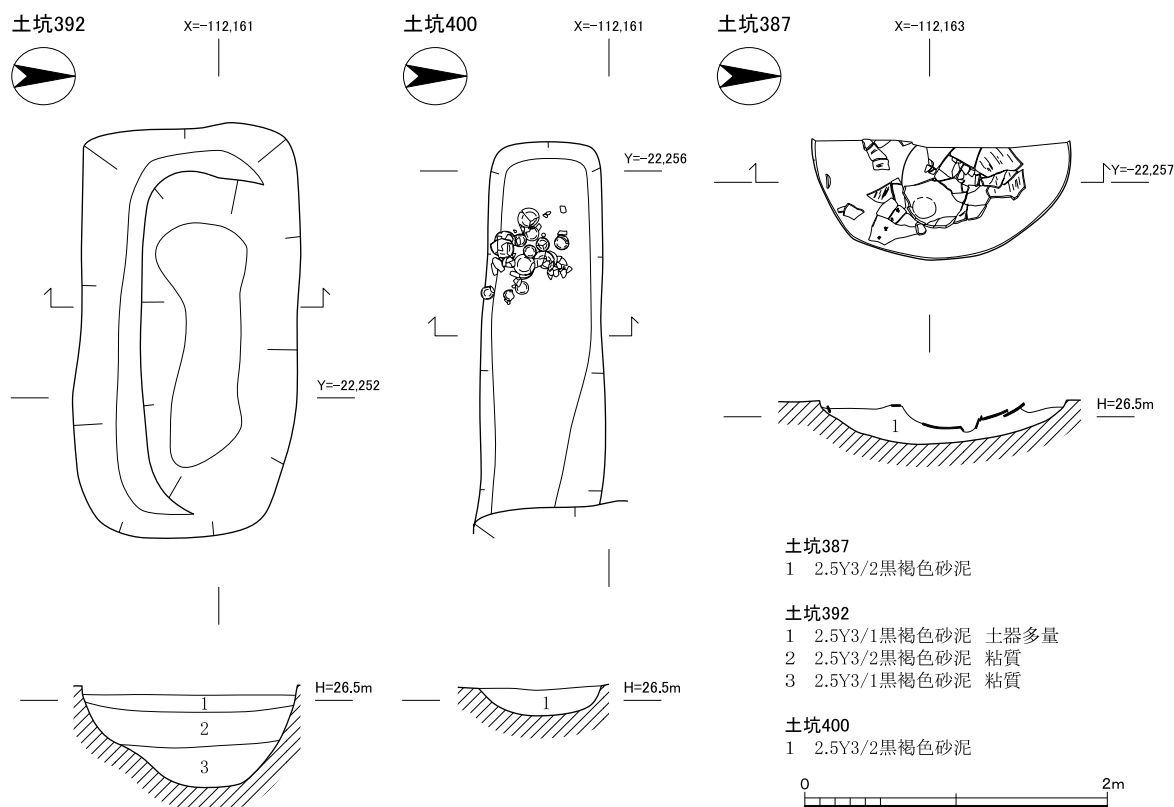


図6 土坑387・392・400実測図（1：50）

0.4～0.5m円形で、深さは約0.1～0.4m。遺物は、京都VI期の土器類が出土した。

柵 4（図版8） 調査区北部で検出した東西方向の柵である。方位はほぼ正方位。複数の柱穴が重複することから修復ないし建て替えがなされたと考えられる。5間分を検出し、その検出長は約10.5mである。柱間は約2.1m程度の等間である。柱穴の掘形は直径0.2～0.5m円形で、深さは約0.2～0.3m。柱穴476には地下式礎石を据える。遺物は、京都VI期の土器類が出土した。

溝 453 調査区北東部で検出した東西方向の溝で、東側は調査区外に広がる。検出長5.8m、幅1.4m、深さ0.2mである。遺物は、京都VI期中段階の土器類が出土した。

土坑 454 調査区北西部の井戸422の西側で検出した。南西部は井戸399に掘り込まれるが、一辺1.9mの方形に復元できる。深さ0.2mである。遺物は、京都VI期中段階の土器類が出土した。

土坑 3 調査区中央西部壁際で検出した。西側は調査区外に広がるが、不正方形に復元できる。検出規模は南北2.2m、東西0.5m、深さ0.2mである。埋土は黒褐色砂泥で、土師器皿の細片を多量に含む。遺物は、京都VI期新段階の土器類が出土した。

土坑 392（図6） 調査区北部で検出した。平面形は長方形で南北1.5m、東西2.7m、深さ0.7mである。遺物は、京都VI期新段階の土器類がまとめて出土した。

土坑 400（図6、図版13） 調査区北部で検出した。東側は土坑392によって掘り込まれるが、平面形は長方形で南北0.8m、東西2.4m以上、深さ0.2mである。遺物は、京都VI期新段階の土器類がまとめて出土した。

土坑 387（図6） 調査区北西部西壁際で検出した。井戸440直上に位置する。西側は調査区外

に広がるが、平面形は直径1.7mの円形に復元できる。深さ0.3mである。掘形内に常滑産の甕を据え、埋甕として利用している。遺物は、京都VI期段階の土器類が出土した。

(4) 鎌倉時代後期から室町時代前期の遺構 (図版2)

この時期の遺構は、第1面で建物・井戸・柵・溝・土坑・多数の柱穴などを検出した。

建物1 (図7、図版14) 調査区南西部で検出した。東西棟の掘立柱建物で、規模は東西5.5m、南北4.2mである。南側柱列の南側には柱穴80と柱穴79の2基が位置し、「凸」字状の平面形となる。方位は北に対してわずかに東に振る。北側・東側及び南側柱列の一部では柱穴を検出できたが、西側柱列及び南側柱列西側は、土坑174・325・377・378などによって掘り込まれ残存してい

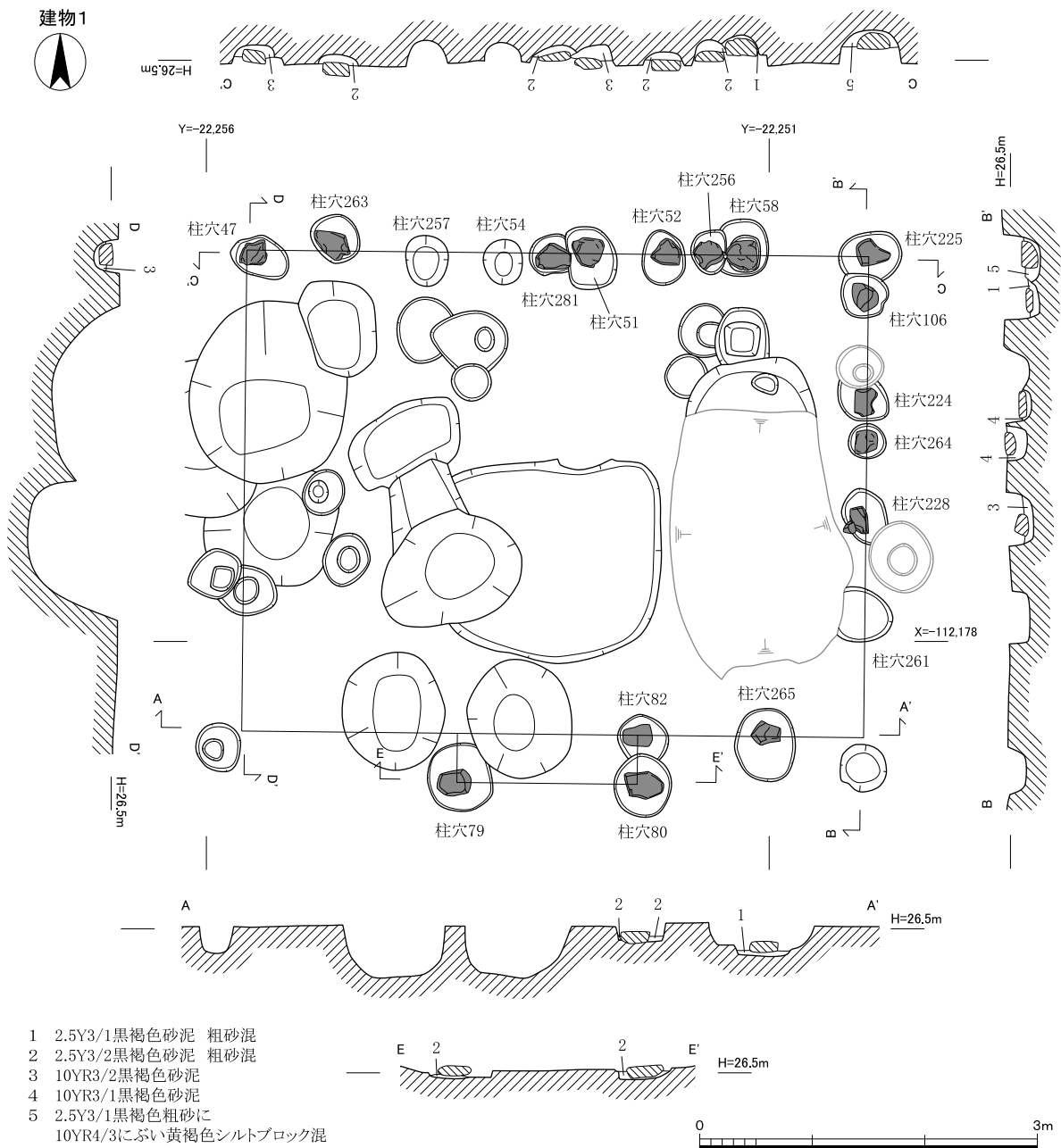


図7 建物1実測図 (1:60)

なかった。柱穴の規模は直径0.3～0.5mの円形で、深さ0.2～0.3mである。掘形内には地下式礎石を据えるが、柱穴54・257などは抜き取られた可能性がある。柱穴225と柱穴106や柱穴58と柱穴256などのように、柱穴が近接しているところもあり、修復が行われたと考えられる。そのためか、柱間は不揃いで一定しないが1m程度と想定できる。南側中央部の柱間は1.6mと他に比べると広いのが特徴である。遺物は、京都Ⅶ期の土器類が出土した。

室1（図版7・15） 調査区中央西部のタタキ6の北側で検出した。掘形の平面形は南北2.8m、東西1.7mの長方形で、南側のみ半円形に張り出すところがある。深さ0.5mである。検出面から0.2m掘り下げたところで、中央部が南北1.5m、東西1.1mの長方形にさらに一段凹むことがわかった。その痕跡は確認できなかったものの、板材などを当てていたと思われる。また、掘形の四隅では、直径0.25mの柱穴を検出したことから、上屋を想定することができる。遺物は、京都Ⅶ期新段階の土器類が出土した。

タタキ6（図版7） 調査区中央部の建物1の北側で検出した。西側は土坑22によって掘り込まれるが、平面形は南北1.0m、東西2.7mの不正方形に復元できる。深さ0.15m程度掘り窪め、そこに黒褐色砂泥を叩き締めながら構築したと思われ、固く締まる。

井戸149（図版7） 調査区中央西部で検出した。掘形の平面形は不正方形で、規模は南北2.3m、東西2.0mである。底部に水溜は見られない。検出面から底部までの深さは1.2mで、底部の標高は25.3mである。井戸枠は横棧部のみが残るが、東側と南側の一部を欠損する。井戸枠の規模は内法で一辺約0.8mに復元できる。枠材の遺存状態は不良である。遺物は、京都Ⅶ期古～中段階の土器類が出土した。

井戸399 調査区北西部で検出した。掘形の平面形は方形で、規模は一辺2.2mで、検出面から底部までの深さは0.6mで、底部の標高は25.9mである。井戸枠は残存していなかった。埋土は粘性の強い黒色シルトである。遺物は、京都Ⅷ期中～新段階の土器類が出土した。

柵1（図版8） 調査区南西部で検出した南北方向の柵である。方位は北に対して東へ約1度振る。3間分を検出し、さらに北側の柱穴168につながると考えられ、その検出長は約7mである。柱間は1m程度の等間。柱穴の掘形は直径0.3m円形で、深さは約0.2m。

柵2（図版8） 調査区南東部で検出した南北方向の柵である。方位は北に対して東へ約4度振る。4間分を検出し、その検出長は約7mである。柱間は1.5m程度の等間で、2mと広いところもある。柱穴の掘形は直径0.5～0.8m円形で、深さは約0.2～0.3m。遺物は、京都Ⅶ期の土器類が出土した。

柵5（図版8） 調査区北端部で検出した東西方向の柵である。方位はほぼ正方位。6間分を検出し、その検出長は約7mである。柱間は約1m程度の等間で、1.5mと広いところもある。柱穴の掘形は直径0.3～0.4m円形で、深さは約0.2～0.3m。

土坑173 調査区南西部で検出した。土坑174を掘り込んで成立する。平面形は直径約1.0mの円形で、深さ0.3mである。遺物は、京都Ⅶ期の土器類が出土した。

土坑325 調査区南西部で検出した。北側は土坑174に掘り込まれるが、平面形は直径1.0mの

円形に復元できる。深さ0.6mである。遺物は、京都Ⅶ期の土器類が出土した。

土坑323（図版7） 調査区南西部西壁際の土坑324の西側で検出した。東側は調査区外に広がるが、平面形は直径1.3mの円形に復元できる。深さ0.25mである。遺物は、京都Ⅶ期中～新段階の土器類が出土した。

土坑324（図版7・15） 調査区南西部の土坑323の東側で検出した。東側は土坑174に掘り込まれるが、平面形は直径1.4mの円形に復元できる。深さ0.3mである。底部中央部には黄褐色シルトの粘質土を0.1m程度の厚さで敷き、底部を整えている。粘質土中央部はわずかに窪んでおり、甕などが据えられていたと考えられる。遺物は、京都Ⅶ期中～新段階の土器類が出土した。土坑323と土坑324は隣り合い、かつ同規模で時期も同じであることから関連した遺構と考えられる。

土坑377（図版7・15） 調査区南部の土坑378の西側で検出した。平面形は円形で、直径1.1m、深さ0.3mである。遺物は、京都Ⅶ期中～新段階の土器類が出土した。

土坑378（図版7・15） 調査区南部土坑377の東側で検出した。建物1を構成する柱穴79を掘り込む。北西部は土坑203によって掘り込まれるが、平面形は直径1.1mの円形に復元できる。深さ0.3mである。遺物は、京都Ⅶ期中～新段階の土器類が出土した。土坑377と土坑378も土坑323・324と同様に土坑同士が隣り合い、かつ同規模で時期も同じであることから関連した遺構と考えられる。甕などが据えられていたのであろうか。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

| | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 750頃 | 840頃 | 930頃 | 1010頃 | 1080~90頃 | 1180頃 | 1270頃 | 1360頃 | 1440頃 | 1500頃 | 1580~90頃 | 1660頃 | 1740年代頃 | 1820年代頃 |
| I | II | III | IV | V | VI | VII | VIII | IX | X | XI | XII | XIII | XIV |
| 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 | 古 中 新 |

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

調査では整理コンテナにして79箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・動物遺存体などがある。出土遺物の大部分は土器類が占め、その他の種類は少ない。

時代別の出土量では、鎌倉時代から室町時代にかけての遺物が8割、平安時代後期が1割強、平安時代中期以前が1割弱である。また、古墳時代の土器類も後世の遺構に混じって小片がわずかに出土している。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について種類ごとに概要を述べる。遺物の時期の表記は、平安京・京都Ⅰ期～ⅩⅣ期の土器編年案¹⁾、輸入陶磁器の器形分類は森田勉氏の分類²⁾を準用する。

(2) 土器類

平安時代前期から中期

湿地477出土土器(図8、図版16) 土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。土師器には皿A(1)、皿L(2・3)、椀A(4)、高杯(5)がある。皿Aは口径13.8cm、器高1.4cm、皿Lは口径14.7～14.5cm、器高2.5cm、椀Aは口径14.7cm、器高3.3cmである。いずれも口縁部は屈曲し、端部を上方につまみあげる。高杯脚部は残存高13.7cmで、断面7角形に面取りする。黒色土器には鉢(6)がある。口径14.6cm、器高8.5cmである。体部外面は横方向のケズリ、体部内面には横方向のミガキを密に施す。底部内面には暗文がある。底部外面には高台を貼りつけてい

表2 遺物概要表

| 時 代 | 内 容 | コンテナ 箱数 | Aランク点数 | Bランク 箱数 | Cランク 箱数 |
|-------------------|--|------------|--|------------|------------|
| 古墳時代 | 須恵器 | | | | |
| 平安時代前期 ～中期 | 土師器、黒色土器、須恵器、 緑釉陶器、灰釉陶器、輸入 陶磁器、土製品、瓦 | | 土師器6点、黒色土器1点、須 恵器5点、緑釉陶器2点、灰釉 陶器2点、輸入陶磁器1点、土 製品1点 | | |
| 平安時代後期 ～鎌倉時代中期 | 土師器、須恵器、白色土器、 瓦器、焼締陶器、輸入陶磁 器、瓦、土製品、石製品、 金属製品、骨 | | 土師器83点、須恵器1点、白色 土器1点、瓦器10点、焼締陶器 1点、輸入陶磁器6点、瓦5点、 土製品1点、石製品2点 | | |
| 鎌倉時代後期 ～室町時代前期 | 土師器、須恵器、白色土器、 瓦器、焼締陶器、施釉陶器、 輸入陶磁器、瓦、土製品、 石製品、金属製品、骨 | | 土師器26点、瓦器4点、施釉陶 器1点、輸入陶磁器1点、土製 品1点、石製品4点、金属製品 5点 | | |
| 合 計 | | 94箱 | 170点(11箱) | 0箱 | 83箱 |

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。

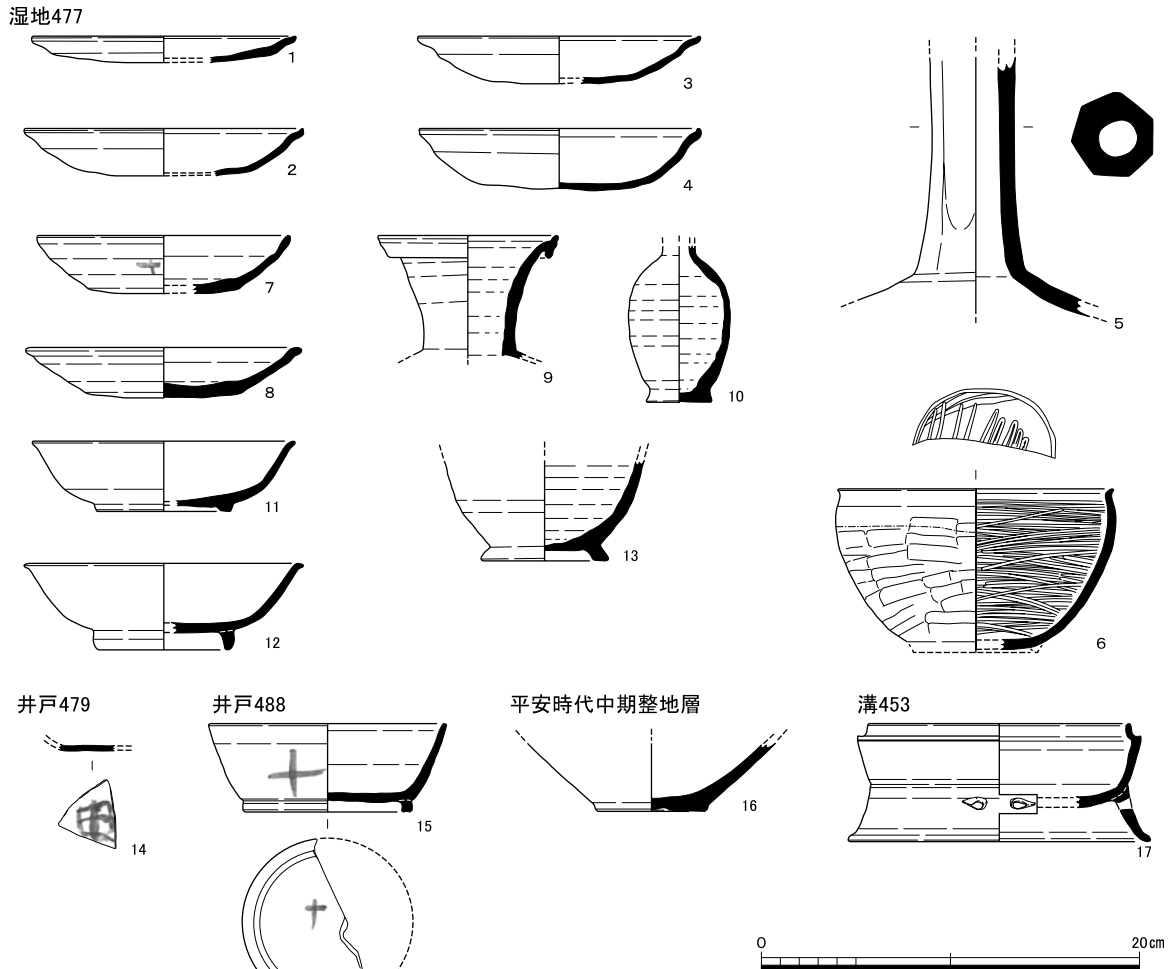


図8 湿地477、井戸479・488、その他の遺構出土土器実測図（1：4）

た痕が残る。須恵器には杯A（7）、皿（8）、壺L（9）、壺M（10）がある。杯Aは口径13.4cm、器高3.1cmで、体部外面に「十」字状の墨書がある。皿は口径14.4cm、器高2.7cmで、口縁部を外側につまみだす。壺Lは口径9.4cm、残存高6.5cmである。壺Mは底径3.4cm、残存高8.3cmである。底部には糸切り痕が残る。緑釉陶器には碗（11）がある。口径13.6cm、器高3.7cmである。高台は削り出しによる輪高台。ヘラミガキは底部外面を除いて粗く施す。全面に施釉される。山城産。灰釉陶器には碗（12）と壺（13）がある。碗は口径14.2cm、器高4.6cmである。壺は底径6.4cm、残存高5.3cmである。底部には糸切り痕がわずかに残る。時期は京都Ⅲ期古段階である。

井戸479出土土器（図8） 土師器がわずかに出土した。土師器（14）は小片で、外面に墨痕がある。時期は京都Ⅲ期と考えられる。

井戸488出土土器（図8、図版16） 土師器・須恵器がわずかに出土した。図示できるのは須恵器のみである。須恵器には杯B（15）がある。口径12.3cm、器高4.7cmである。体部外面と底部外面の2箇所に「十」字状の墨痕がある。時期は京都Ⅲ期である。

整地層出土土器（図8） 平安時代中期の整地層から出土した。輸入陶磁器の越州窯青磁の碗（16）がある。底径5.8cm、残存高3.6cmである。高台は蛇の目高台である。全面に施釉がみられる。体部内面に幅0.1cm程度の褐色の線がある。

溝453出土土器（図8） 混入品で鎌倉時代の溝から出土した。緑釉陶器の香炉（17）がある。口径12.3cm、器高6.3cmである。脚部に2孔一対の透かし孔を穿つ。透かし孔内面端部は丁寧に面取りされている。

平安時代後期から鎌倉時代中期

井戸458出土土器（図9、図版16） 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。土師器には皿Ac（18・19）、皿N（20～27）、ミニチュア羽釜（28）がある。皿Acの口径は7.4～7.7cm、器高1.0cmである。皿Nは口径8.6～9.4cm、器高1.6～2.0cm（20～24）と口径14.5～15.3cm、器高3.2～3.7cm（25～27）の2群がある。口縁部には2段ナデが施されるものとそうでないものがあり、口縁端部は上方につまみあげる。ミニチュア羽釜（28）は口径12.3cm、残存高2.8cmである。口縁部外面に鍔がめぐる。内外面ともに横方向のナデで丁寧に調整される。時期は京都

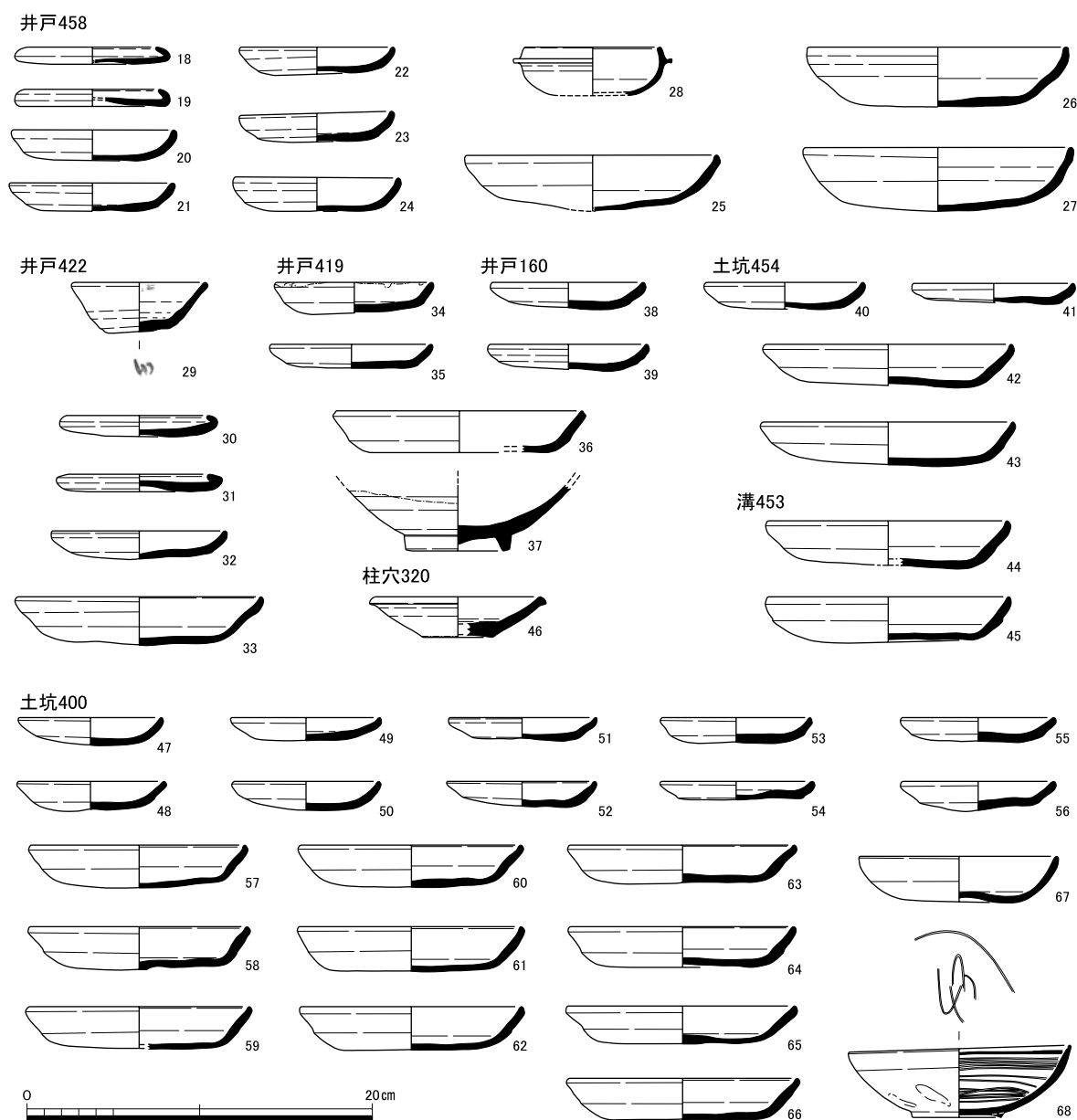


図9 井戸160・419・422・458、溝453、土坑400・454、柱穴320出土土器実測図（1：4）

V期古～中段階である。

井戸422出土土器（図9、図版16） 土師器・須恵器・白色土器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。土師器には皿Ac（30・31）、皿N（32・33）がある。皿Acは口径8.2cm、器高1.0～1.2cmである。内外面ともに赤褐色を呈し、良く焼き締まる。皿Nは口径10.0cm、器高1.7cm（32）と口径14.1cm、器高3.0cm（33）の2群がある。白色土器には小杯（29）がある。口径12.3cm、器高2.9cmである。底部には糸切り痕が明瞭に残る。口縁部内面には「散」の墨書がある³⁾。底部外面には「ゆ」とみられる墨書がある⁴⁾。時期は京都VI期中段階である。

井戸419出土土器（図9） 土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。土師器には皿N（34～36）がある。皿Nは口径9.2～9.3cm、器高1.4～1.9cm（34・35）と口径14.2cm、器高2.4cm（36）の2群がある。輸入陶磁器には青磁椀（37）がある。底径5.2cmである。体部外面下半から底部以外には施釉される。時期は京都VI期中～新段階である。

井戸160出土土器（図9） 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。図示できるのは土師器のみである。土師器には皿N（38・39）がある。口径は8.8～9.1cm、器高1.6cmである。時期は京都VI期中～新段階である。

土坑454出土土器（図9） 土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・鉄釘が出土した。土師器には皿N（40～43）がある。皿Nは口径9.0～9.2cm、器高1.2～1.6cm（40・41）と口径14.2～14.4cm、器高2.5cm前後（42・43）の2群がある。時期は京都VI期中段階である。

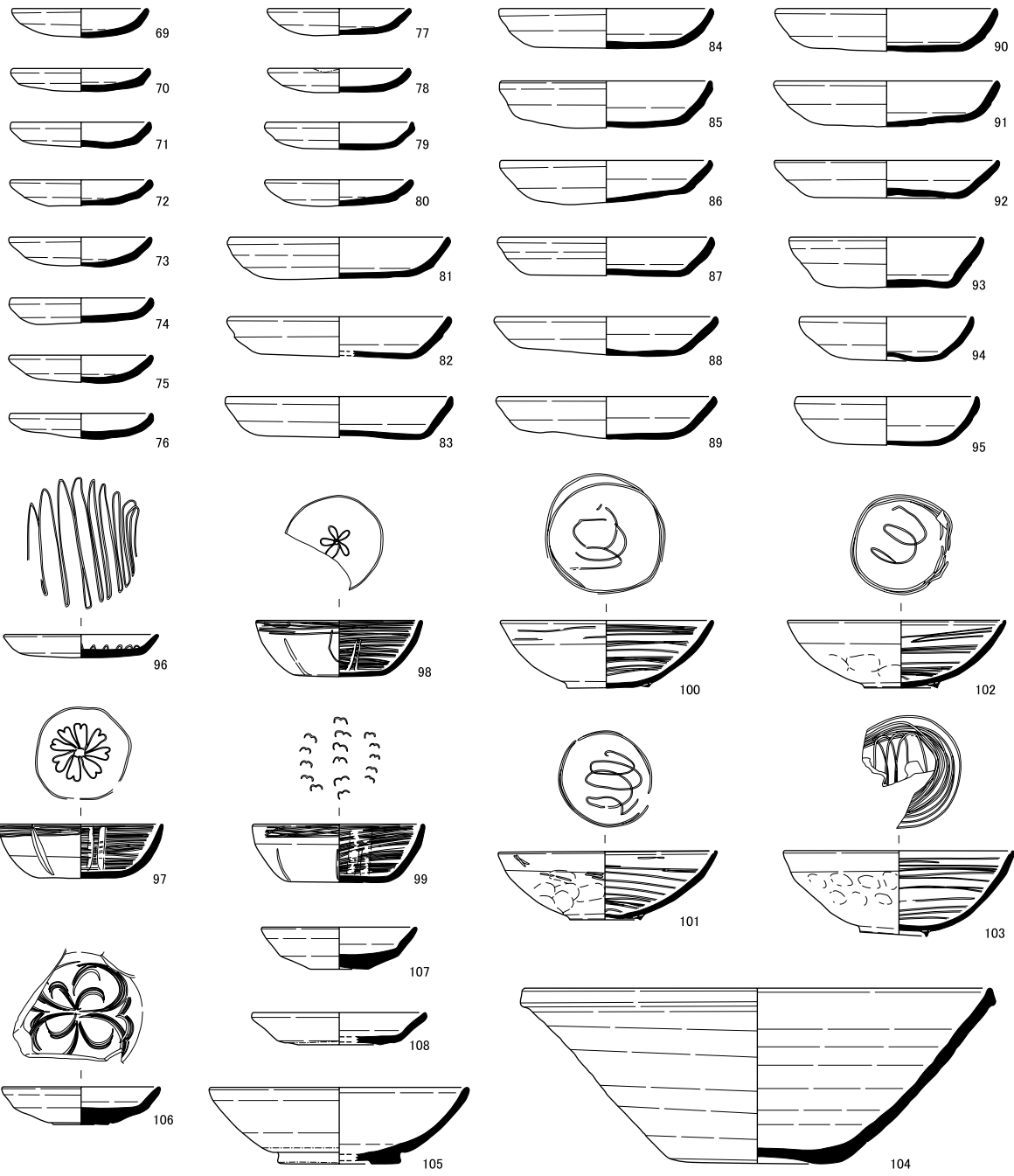
溝453出土土器（図9） 土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。図示できるのは土師器のみである。土師器には皿N（44・45）がある。口径は13.8～13.9cm、器高2.8cm前後である。時期は京都VI期中段階である。

柱穴320出土土器（図9） 輸入陶磁器の白磁皿IV類（46）が出土した。口径は9.6cm、器高2.4cmである。底部外面以外は施釉される。胎土は密で、黒色砂粒を少量含む。時期は京都VI期である。

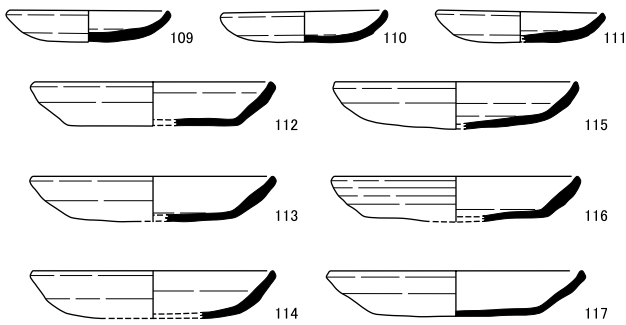
土坑400出土土器（図9、図版16） 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。土師器には皿N（47～66）と皿S（67）がある。皿Nは口径8.2～8.8cm、器高1.1～1.8cm（47～56）と口径12.4～13.2cm、器高2.2～2.6cm（57～66）の2群がある。皿Sは口径11.4cm、器高2.7cmである。瓦器には椀（68）がある。口径14.4cm、器高4.0cm。内面には暗文を施す。時期は京都VI期新段階である。

土坑392出土土器（図10、図版17） 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。土師器には皿N（69～93）と皿S（94・95）がある。皿Nは口径8.1～8.9cm、器高1.4～1.8cm（69～80）と口径11.2～13.5cm、器高2.3～2.8cm（81～92）の2群がある。93は底部から口縁部にかけて直線的に開き、器高が3.1cmと深い形態である。口径は11.5cm。皿Sは口径10.4～10.9cm、器高2.7～3.0cmである。瓦器には皿（96）、輪花椀（97～99）、椀（100～103）がある。皿は口径9.3cm、器高1.4cmで、底部内面に暗文を施す。輪花椀は口径9.8～10.2cm、器高3.3～3.5cmで、体部外面には輪花のヘラ痕が5箇所ある。底部内面には花などの暗文を施す。椀は口径12.8～13.8cm、器高4.1～4.2cmである。内面には暗文をやや粗く施す。須恵器には東播系の鉢（104）がある。口径

土坑392



土坑3



井戸253

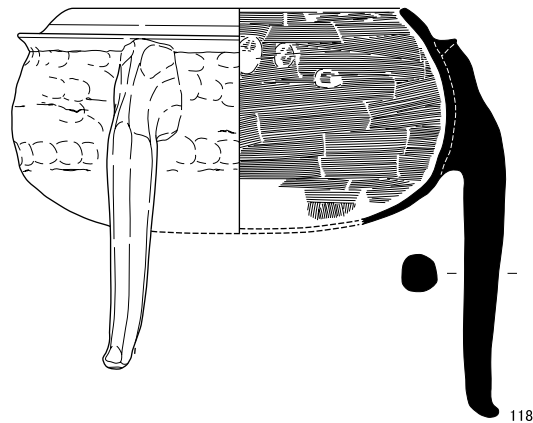


图10 土坑3·392、井戸253出土土器实测图(1:4)

28.2cm、器高10.6cmである。内面下半は使用により平滑である。底部内面中央部が黒色化する。輸入陶磁器には白磁・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁がある。白磁には椀Ⅰ類(105)がある。高台は蛇の目高台である。畳付け以外は施釉されるが、高台内側の施釉は部分的である。畳付けはやや平滑である。胎土はうすい灰色で均質である。龍泉窯系青磁には皿(106・107)がある。口径9.1～9.4cm、器高2.5～3.3cmである。106の底部内面にはヘラ片彫りの花文がある。底部外面以外は施釉され、底部外面の釉は焼成前にかき取られている。107も底部外面以外は施釉される。同安窯系青磁には皿(108)がある。口径9.1～9.4cm、器高1.9cmである。体部外面下半から底部外面にかけては無釉である。時期は京都Ⅵ期新段階である。

土坑3出土土器(図10) 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。図示できるのは土師器のみである。皿Nは口径8.3～8.7cm、器高1.7cm前後(109～111)と口径12.5～13.3cm、器高2.3～2.5cm(112～117)の2群がある。時期は京都Ⅵ期新段階である。

井戸253出土土器(図10) 土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。瓦器には三足羽釜(118)がある。口径17.6cm、器高21.6cmである。内傾する口縁部外面に鏝がめぐる。外面はオサエ、内面はハケメ調整である。時期は京都Ⅵ期新段階である。

土坑387出土土器(図12) 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。常滑産焼締陶器の大甕(151)は残存高62.9cmである。底部は大きく歪んでいる。時期は京都Ⅵ期である。

鎌倉時代後期から室町時代前期

室1出土土器(図11、図版17) 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。土師器には皿N(119～121)と、皿Sc(122)、皿Sh(123～127)、皿S(128～130)がある。皿Nは口径7.8cm、器高1.5cm(119)と口径10.0～10.4cm、器高2.0cm前後(120～121)の2群がある。121の口縁部にはススが付着する。皿SAc(122)は口径5.2cm、器高1.3cm、皿Shは口径6.4～7.1cm、高さ1.9～2.2cm、皿S(128～130)は口径13.1～13.8cm、器高3.5～3.8cmである。瓦器には火鉢(131)がある。口径36.8cm、底径29.5cm、器高11.3cmである。底部外面には小さな方形の脚がつく。輸入陶磁器には磁州窯系陶器の小片(132)がある。厚さ0.6cmである。外面には白化粧を施し、その上に鉄絵で文様を描く。胎土は濃い灰色で、白色砂粒をわずかに含む。時期は京都Ⅶ期新段階である。

土坑173出土土器(図11) 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器などが出土した。瓦器には火鉢(149)がある。口径44.6cm、器高10.3cmである。体部は直立気味に外反して開き、口縁端部は幅広い面をもつ。調整は外面にオサエ、内面に横方向のナデを施す。時期は京都Ⅶ期新段階である。

井戸149出土土器(図11) 土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・焼締陶器が出土した。瓦器には火鉢(150)がある。口径47.6cm、残存高11.1cmである。体部は直立気味に開き、口縁端部は幅広い面をもつ。調整は外面にオサエ、内面に横方向のナデを施す。時期は京都Ⅶ期中～新段階である。

井戸399出土土器(図11、図版17) 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器が出土した。土師器には皿N(133～136)、皿Sc(137)、皿S(138～145)、鉢(146)がある。皿

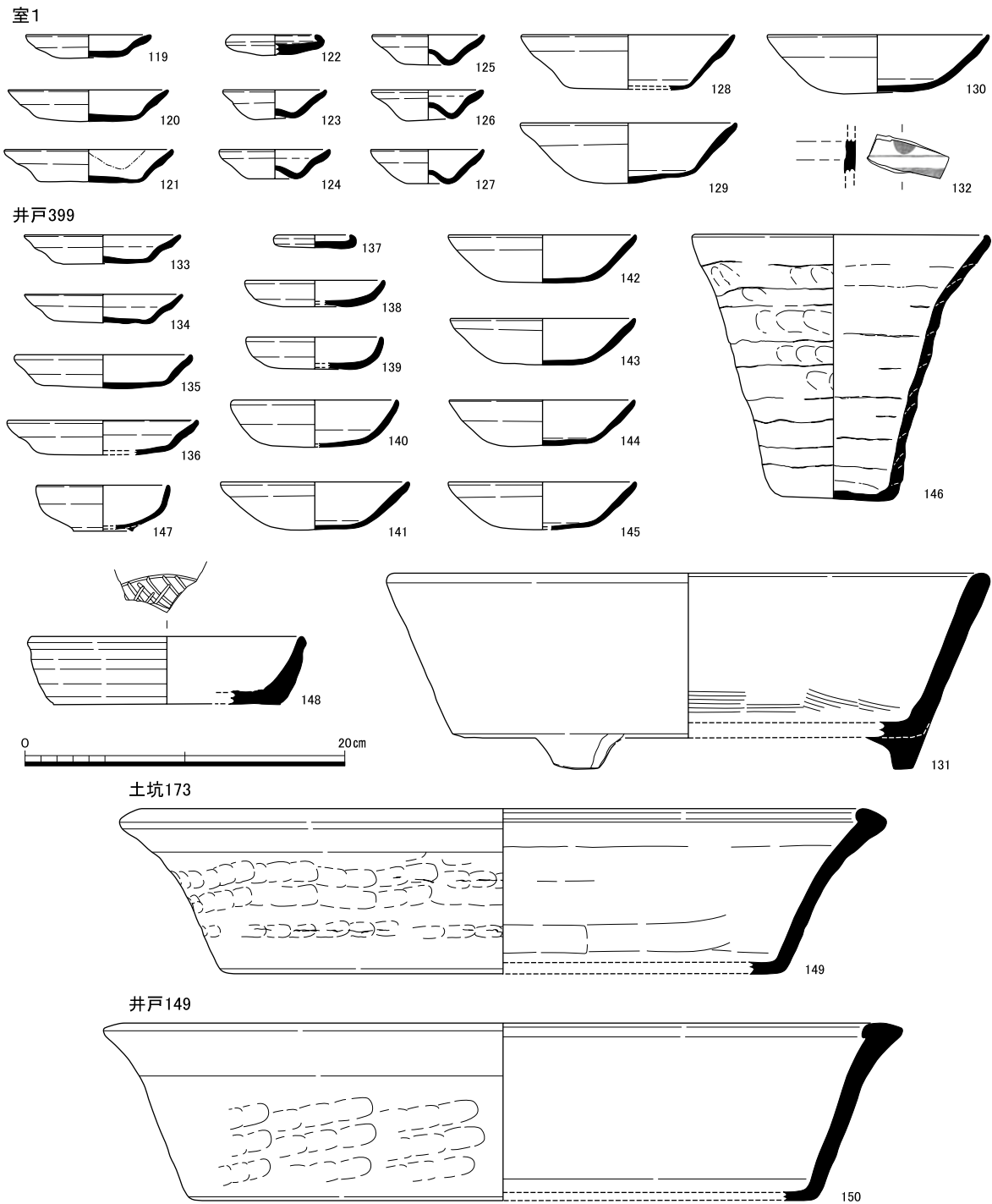


図11 室1、井戸149・399、土坑173出土土器実測図（1：4）

Nは口径9.8～9.8cm、器高9.8～9.9cm（133・134）と口径11.0～11.8cm、器高2.2cm前後（135・136）の2群がある。皿Scは口径4.5cmである。皿Sは口径8.4～8.6cm、器高1.7～2.0cm（138～139）と口径10.3cm、器高3.0cm（140）と口径11.4～11.7cm、器高3cm前後（141～145）の3群がある。鉢は口径18.2cm、器高16.9cm、底径7.2cmである。調整は内外面ともにナデを粗く施す。粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。胎土は精良で、白色・赤色砂粒をわずかに含む。瓦器には椀（147）がある。口径8.2cm、器高11.3cmである。施釉陶器には卸皿（148）がある。口径17.0cm、器高4.3cmである。時期は京都Ⅷ期古～中段階である。

土坑387

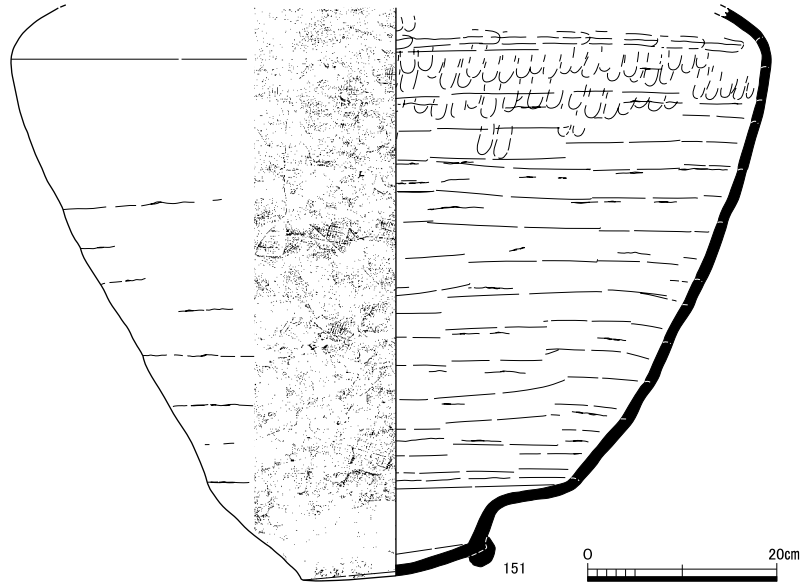


図12 土坑387出土土器実測図（1：8）

（3）瓦類（図13）

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。平安時代後期から鎌倉時代にかけての瓦が大部分を占め、平安時代中期以前の瓦も少量出土している。調査で出土した量は少なく、比較的まとまって出土した井戸422でも、その量は遺物コンテナ1箱にも満たない。

軒丸瓦（瓦1・2） 瓦1は巴文軒丸瓦である。井戸422曲物内から出土した。右巻き二巴の尾部は長く伸び、界線となる。外区には珠文が配置される。瓦当側面から裏面にはナデを施す。焼成は軟質で、色調は外面・断面ともに灰黄色である。胎土には3mmまでの白色砂粒をわずかに含む。時期は平安時代後期。山城産。

瓦2は巴文軒丸瓦である。井戸422曲物内から出土した。右巻き巴で、外区には珠文が配置される。瓦当側面から裏面にはナデを施す。焼成は軟質で、色調は外面・断面ともに灰色である。胎土には4mmまでの白色砂粒をやや多く含む。時期は平安時代後期。山城産。

軒平瓦（瓦3～5） 瓦3は宝相華文軒平瓦である。井戸422曲物内から出土した。瓦当成形は折り曲げによる。瓦当顎部から裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面には布目、凸面にはタタキが残る。焼成は軟質で、色調は外面・

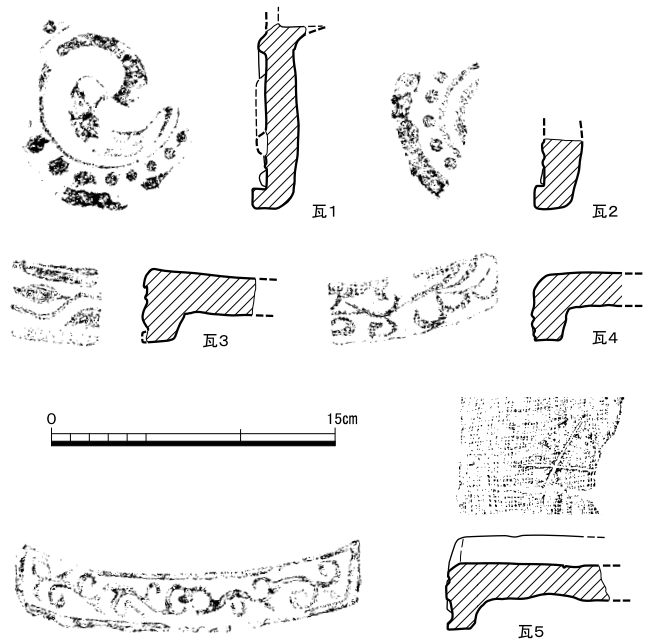


図13 瓦類拓影及び実測図（1：4）

断面ともに褐色である。胎土には5mmまでの白色砂粒を少量含む。時期は平安時代後期。山城産。

瓦4は唐草文軒平瓦である。井戸422曲物内から出土した。瓦当成形は折り曲げによる。瓦当顎部は横方向のケズリを施す。裏面には横方向の皺が明瞭に残る。平瓦凹面には布目が残る。凸面はタタキのち縦方向のナデである。焼成は軟質で、色調は外面・断面ともに灰色である。胎土には3mmまでの白色砂粒を少量含む。時期は平安時代後期。山城産。

瓦5は唐草文軒平瓦である。井戸422曲物内から出土した。瓦当成形は折り曲げによる。瓦当顎部は横方向のケズリ、裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面には布目、凸面にはタタキが残る。平瓦凹面にはヘラ記号がある。焼成は軟質で、色調は外面・断面ともに黄褐色である。胎土には3mmまでの白色砂粒を少量含む。時期は平安時代後期。山城産。

(4) 土製品 (図14)

土製品にはおはじき・硯・埴・鑄型がある。鑄型には鏡などがあるが、小片のため図示できない。

おはじき(土1) 土師器皿の口縁部を打ち欠いて円盤状に加工する。直径2.4cm、厚さ0.5cmである。土坑400から出土した。

硯(土2) 風字硯である。裏面には脚部が剥離した痕が見られる。硯面は非常に平滑で、墨痕が残るところもある。裏面にのみ灰釉が施釉される。平安時代中期の整地層から出土した。

埴(土3) 方形有孔埴である。残存長13.1cm、幅16.2cm、厚さ4.5cm、孔の径約4.5cmである。中央部がわずかに窪む。調整は縄タタキののち、周縁部の一部をナデる。時期は鎌倉時代後期から室町時代前期である。土坑325から出土した。

(5) 石製品 (図15)

石製品には砥石・硯・石鍋・不明品がある。

砥石(石1~3) 図示したもの以外に8点出土している。平面形はいずれも長方形であるが、扁平なもの(石1・2)と厚みがある箱形のもの(石3)がある。石1と石3は井戸399から出土、

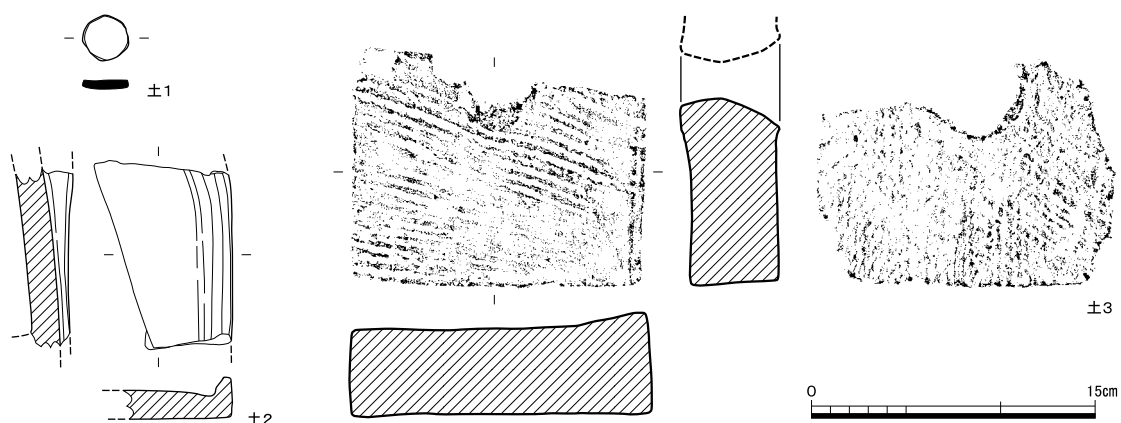


図14 土製品実測図(1:4)

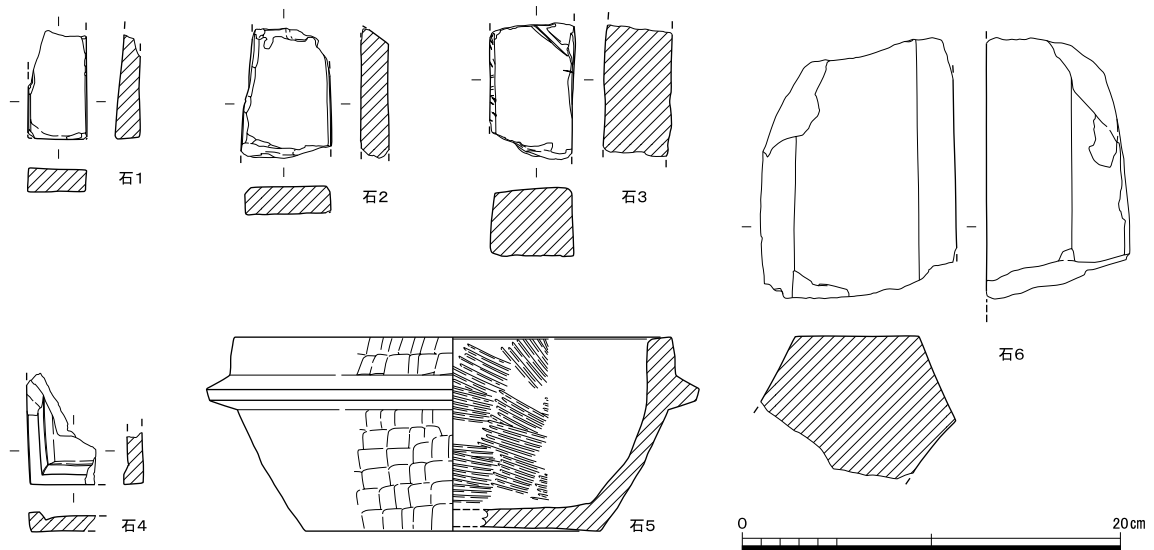


図15 石製品実測図（1：4）

石2は土坑400から出土した。

硯（石4） 残存長5.9cm、残存幅3.1cm、重さ26.5gである。硯面はやや平滑である。頁岩ないしは粘板岩製である。室1から出土した。

石鍋（石5） 図示したもの以外に小片が8点出土している。口径23.1cm、15.6cmである。口縁部外面に鏝がめぐる。滑石製である。内外面ともに加工痕が良好に残る。内面の加工痕は幅0.2～0.3cm程度の線状で、外面の加工痕は幅1.5cm程度の方角ないし長方形である。重機掘削中に出土した。

不明品（石6） 残存長13.8cm、残存幅10.4cm、残存厚7.6cm、重さ1.4kgである。裏面は欠損するが、断面六角形に加工しているように復元できる。表面には加工痕が残る。被熱を受けた痕が残るところもある。井戸149から出土した。

（6）金属製品（図16）

金属製品には銭貨・鉄釘・不明品などがある。

銭貨（金1）は、天聖元寶である。北宋銭。初鑄は天聖元年（1023）である。井戸399から出土した。

鉄釘（金2～4） 36点出土し、このうち遺存状態の良い3点を図示した。両端を欠損するが、全長5～7cmと思われる。金1は井戸1、金2・3は井戸399から出土した。

不明品（金5） 平面形は楕円形の鉄製品である。土圧によりやや歪んでいる。厚さ0.4cm程度の薄い板を加工し、つくられている。肉眼観察では直径0.4cm程度の孔が2箇所に見られる。長軸18.8cm、短軸16.7cm、高さ3.0cm、重量105gである。室1から出土した。

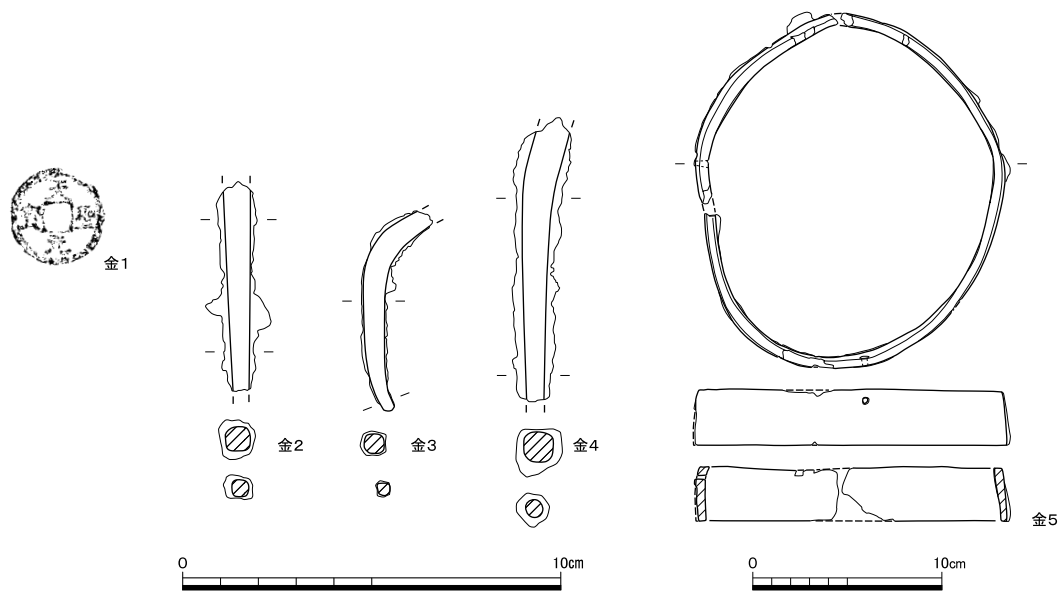


図16 金属製品拓影及び実測図（1：2、金4のみ1：4）

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『大宰府陶磁器研究』 森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 1995年
- 3) 他の出土例から「白散」の可能性もある。「白散」銘の墨書土器は、平安時代後期から鎌倉時代の鳥羽離宮や平安京左京八条三坊四町跡の調査で出土している。
『平安京跡発掘資料選（二）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1986年
『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 4) 西山良平氏・吉野秋二氏に教示いただいた。

5. まとめ (図17・18)

今回の調査では、平安京左京八条三坊一町の中心部において平安時代から室町時代にかけての遺構を検出した。以下では、遺構の変遷を1～4期にわけて述べることとする。

1期(平安時代中期以前) 1期の遺構には井戸479・488、溝384、湿地477がある。湿地477の埋土には平安時代前期に遡る遺物はほとんど含まれていない。また、井戸2基がある他に顕著な遺構は見られず、土地利用は低調であったと考えられる。平安時代中期前半には調査地全体が整地されているが、この上面で顕著な遺構は検出できなかったことから、この時期も土地利用は低調であったことがわかる。調査地が一町の中央部に位置することに加え、湿地が存在するなど利用しにくい立地が関係すると思われる。

2期(平安時代後期から鎌倉時代前期) 平安時代後期になると井戸などの存在から宅地としての土地利用が見られるようになるが、遺構数が少ない。ただし、井戸458の井戸枠は横板蒸籠組で、枠内規模が1.45mと、平安京内の一般的な井戸よりも大きい。また、井戸458の他に同時期の顕著な遺構が見られず、宅地を構成する建物などは調査区外に存在すると考えられることから、一定規模の宅地の一画であると想定することができる。鎌倉時代前期になると井戸422や溝453・土坑454など遺構数がわずかに増加する。井戸422は井戸458の北西に位置し、その位置がほぼ踏襲されることから造り変えられたものと考えられる。そのため、一定期間継続して宅地として利用されたものと考えられる。溝453の西端部は調査区中央部で途切れ、その端部は四行八門推定ラインとは一致しない。宅地内を区画した溝と考えられる。

井戸422からは「散」と墨書された白色土器の杯が出土している。これまでの出土例から「白散」だとすると、元日の儀礼に用いられたもので、¹⁾その使用の機会や場は限定的であったと考えられ

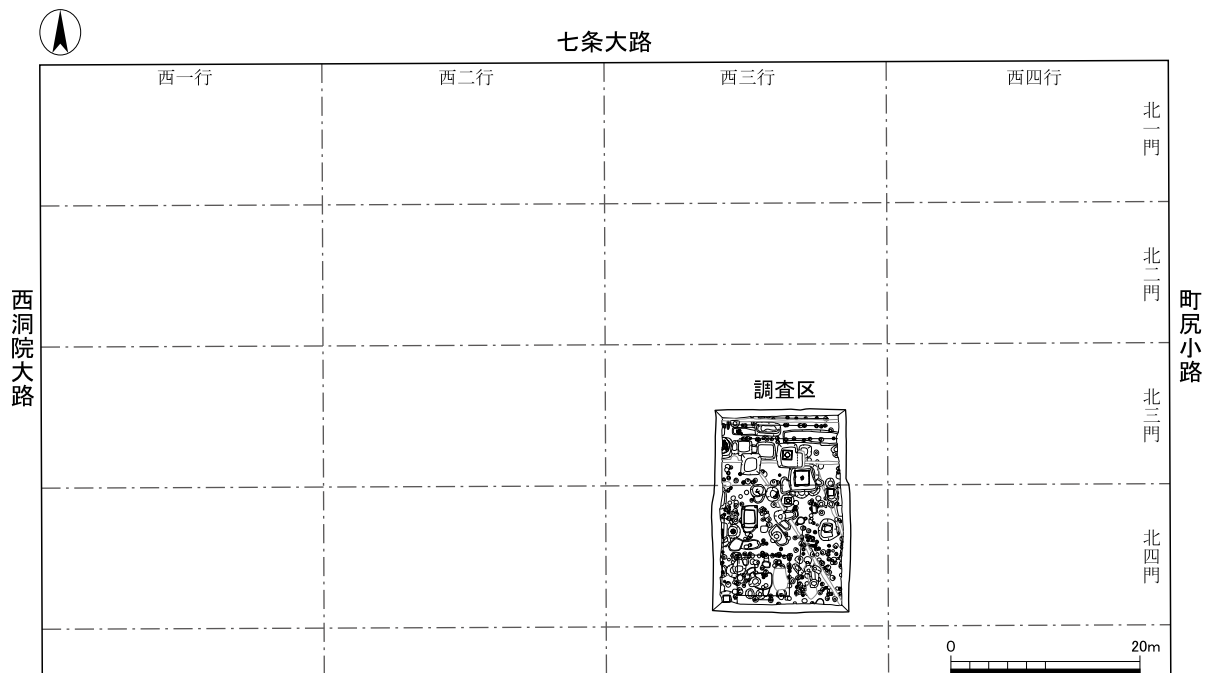
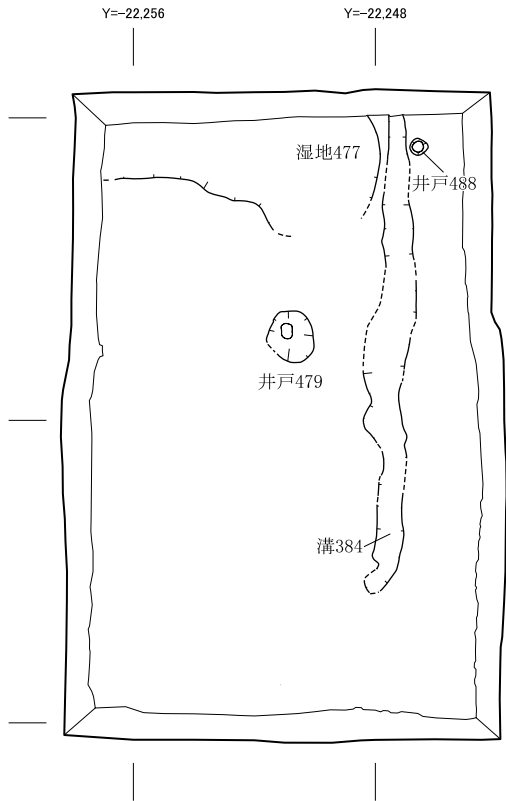
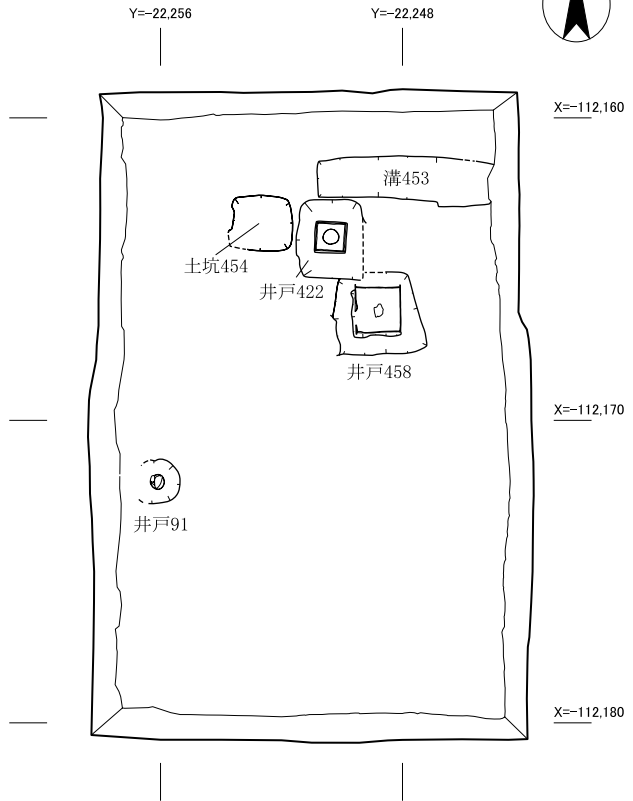


図17 一町における調査区の位置 (1 : 800)

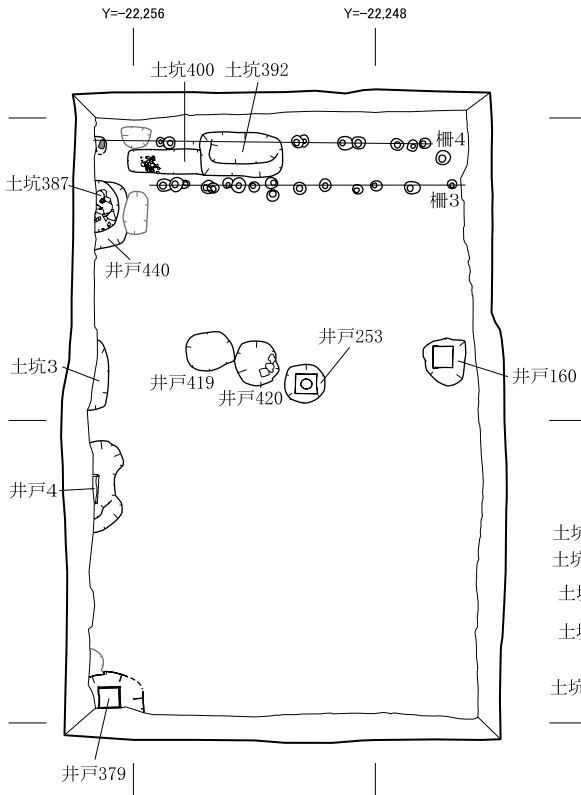
1期 (平安時代中期以前)



2期 (平安時代後期～鎌倉時代前期)



3期 (鎌倉時代中期)



4期 (鎌倉時代後期～室町時代)

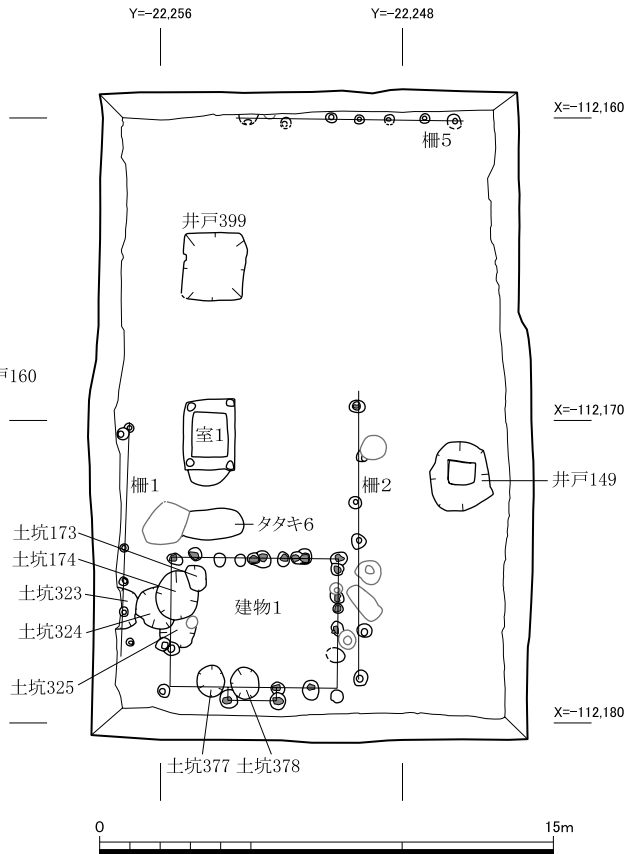


図18 主要遺構変遷図 (1 : 250)

る。宅地の規模や性格の一端を示している可能性があるが、他の類例やその出土地の性格を踏まえた検討が必要と思われる。

3期（鎌倉時代中期） 3期になると遺構・遺物の出土量が急増する。2期のような大規模な井戸は見られなくなり、小規模な井戸が多数存在する。井戸は調査区中央部に東西方向、西壁際に南北方向に一定間隔で並ぶように位置する。東西方向に並ぶ井戸160・253・419より南側では多数の柱穴を検出しおり、復元はできないものの建物が存在すると考えられる。一方、井戸より北側には、土坑392や400などが位置し、柱穴の検出数は少ない。また、北端には柵3・4が3期の溝453とほぼ同じところに位置し、区画が踏襲され続けていることがわかる。この時期も四行八門推定ラインには捉われない。遺構の配置からは入口が南側に開く、比較的小規模な宅地として利用されたと考えられる。

4期（鎌倉時代後期から室町時代） 4期になると整地がなされ、この上面から遺構が成立する。調査区南西部には、東西棟の地下式礎石をもつ建物1が位置する。構造上の特徴としては、1m程度と想定できる間隔の狭い柱穴が四周を巡る。似た構造の建物として平安京左京八条三坊九町跡²⁾の建物1、平安京左京九条二坊十六町跡³⁾の建物1、平安京右京北辺三坊六町跡⁴⁾の掘立柱建物1が検出されている。建物の上部構造については、平安京左京九条二坊十六町跡例については縁ないしは庇をもつ御堂、平安京右京北辺三坊六町跡例については土壁構造の蔵のような建物として復元案が提示されている。本調査で検出した建物1の北側にタタキ6、室1の順に並ぶ。建物1とタタキ6は遺物の出土が少量であるため、詳細な時期は確定し得ないが、その配置からこの3つの遺構は関連したものと考えられる。室1の南側にはスロープ状の張出しが伴い、出入口として機能していた可能性がある。建物1は東西に南北方向の柵が位置し、建物が区画されている。また、北端には柵5が位置し、2・3期以来の区画が踏襲されている。建物1の廃絶後には、重複する位置に土坑が複数掘られ、土地利用ないし空間利用のありかたに変化があったものと考えられる。4期の遺構からも、周辺調査で多数出土する鑄造関連遺物の出土はわずかで、関連した遺構も見られないことから、鑄造に関連した工房域としての土地利用は考えにくい。

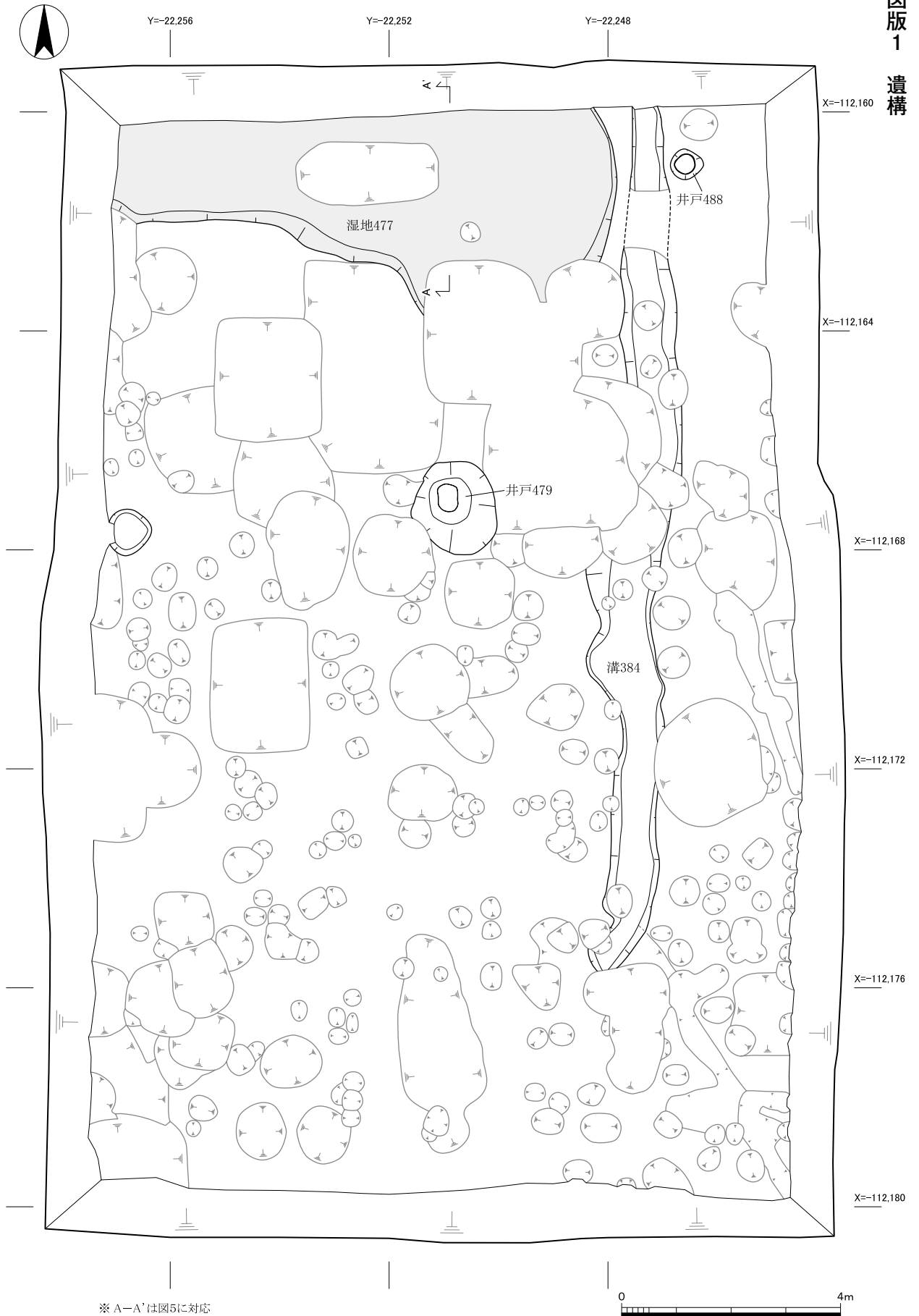
今回の調査で検出した最も新しい時期の遺構は井戸399で、14世紀後半には埋没する。他に同時期の遺構は見られないが、この時期まで宅地として利用されていたようであるが、この後、江戸時代に至るまで土地利用は途絶える。

本調査では、左京八条三坊一町中央部の土地利用の様相及び変遷が明らかになった。遺跡の推移としては、これまでの周辺調査の成果と合致するところが多く認められる。その一方で、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけては一定規模の宅地として利用され、鎌倉時代中期以降に小規模な宅地へと細分化されていく様子が明らかになったことは大きな成果といえよう。

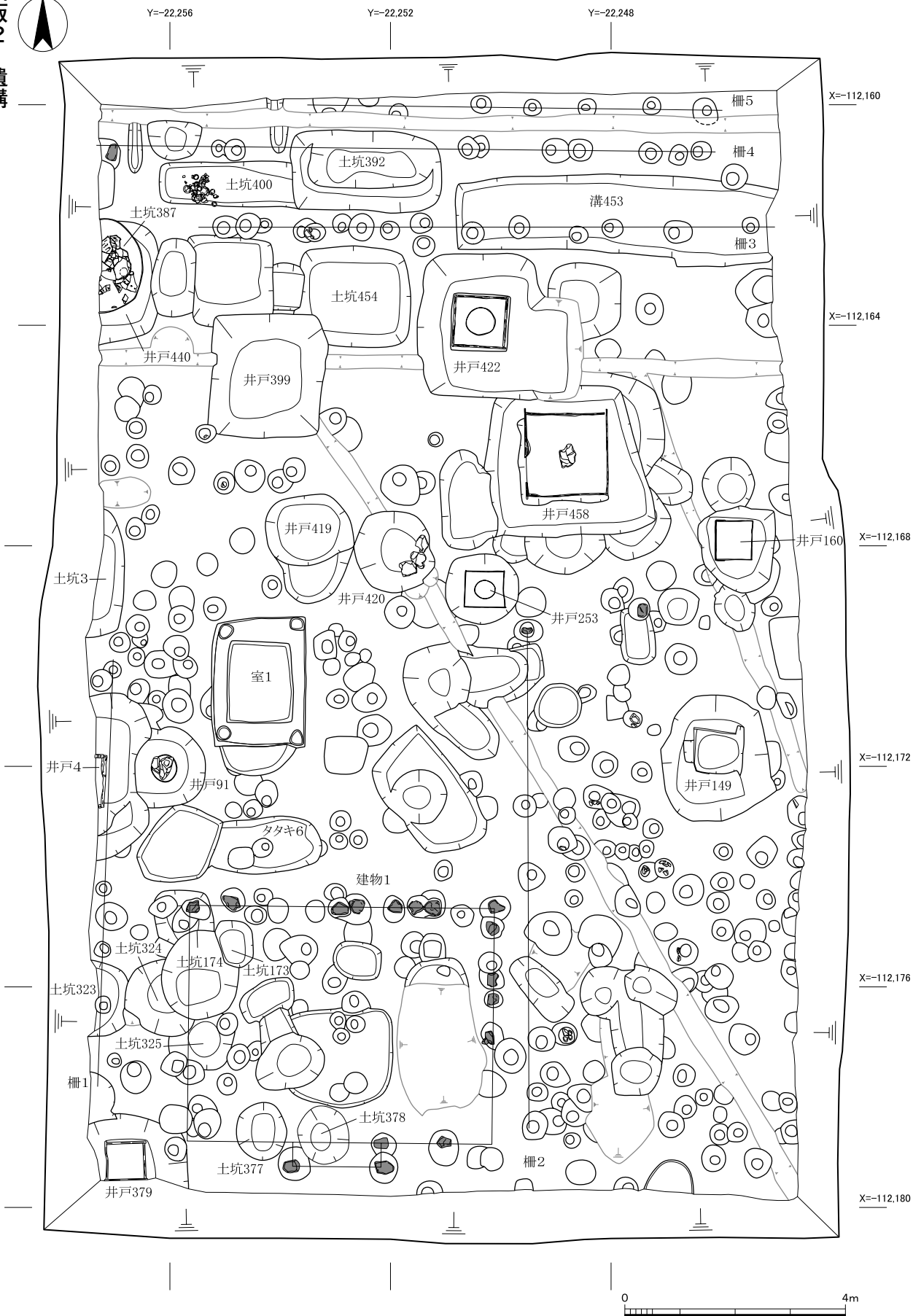
註

- 1) 延喜式 卷三十七 典藥寮の記述に「元日御藥。白散一劑。度嶂散一劑。屠蘇一劑。・・・」との記述がある。
- 2) 『平安京左京八条三坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 3) 『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 4) 『平安京右京北辺三坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-14 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年

圖 版

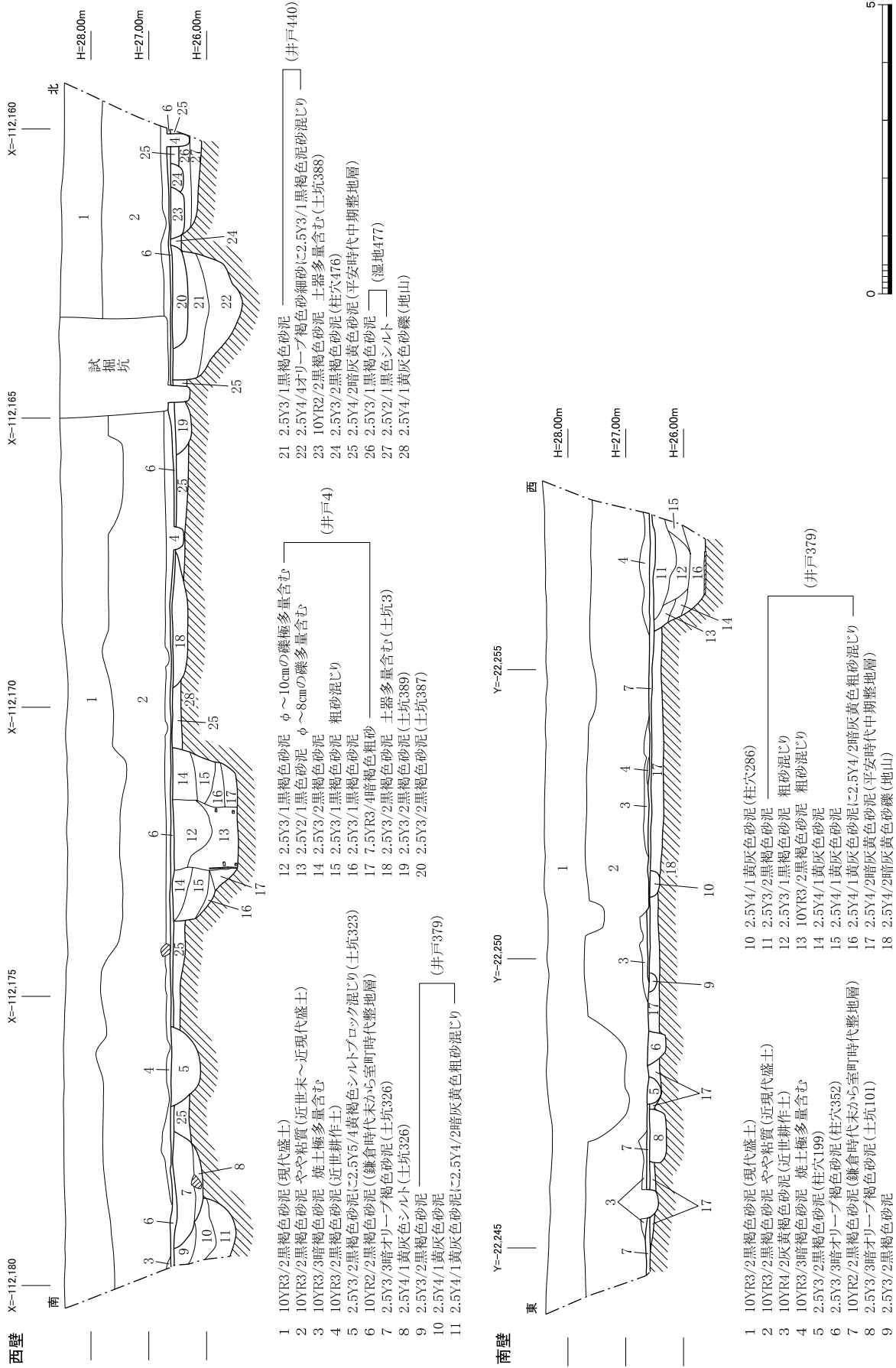


第2面遺構平面図 (1 : 100)

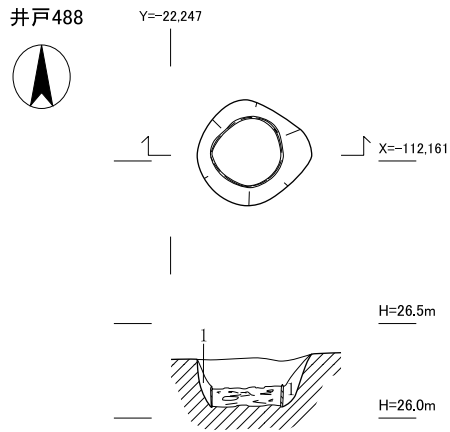


第1面遺構平面図 (1 : 100)

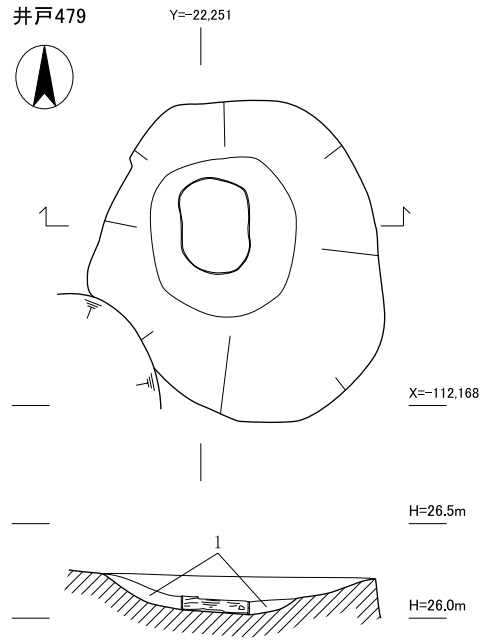
調査区西壁・南壁断面図 (1 : 100)



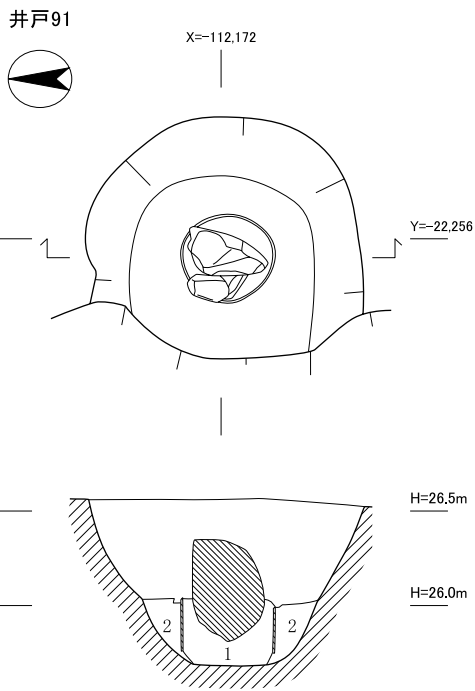
図版4
遺構



1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ~3cm礫やや多量



1 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 φ~5cm礫多量

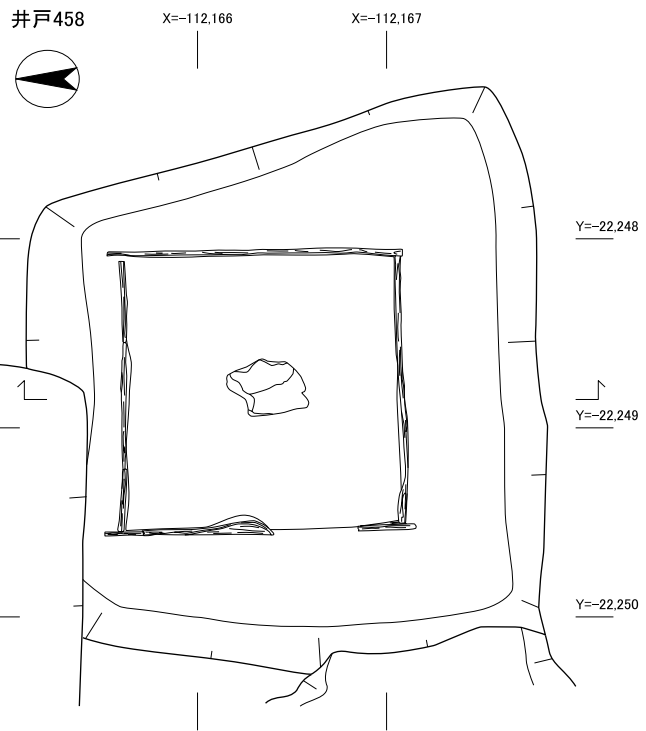


井戸91

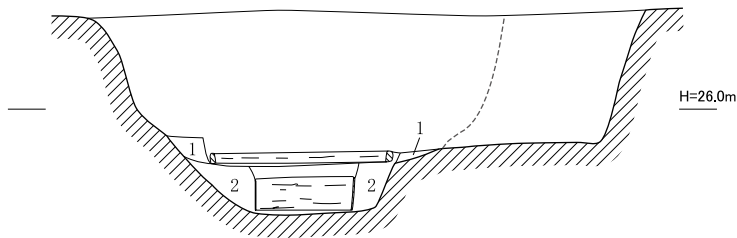
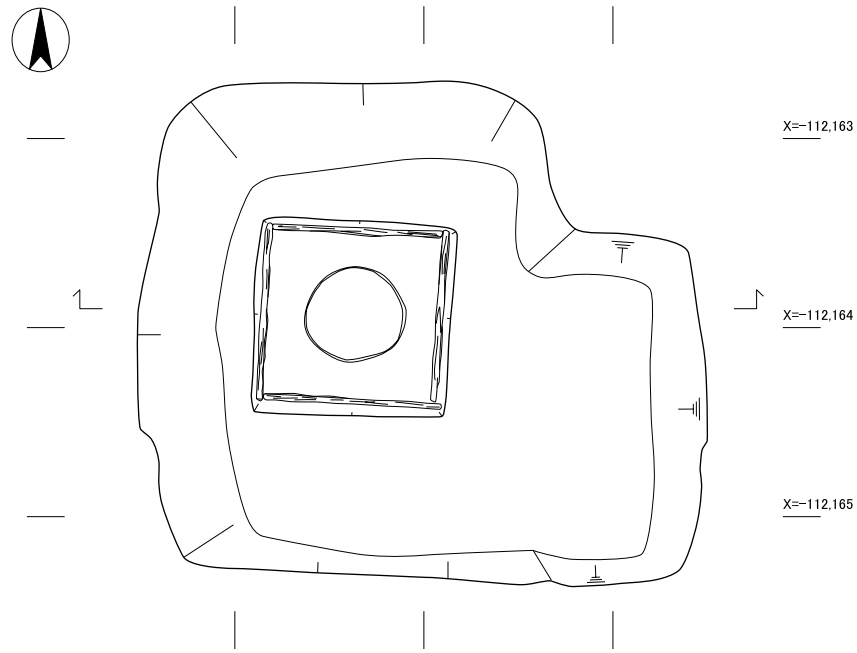
- 1 2.5Y4/2黄灰色砂泥 砂礫混
- 2 2.5Y3/2黒褐色砂泥

井戸458

- 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ~5cm礫多量
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫 φ3~10cm礫多量
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 一部、2.5Y3/2黒褐色泥砂混

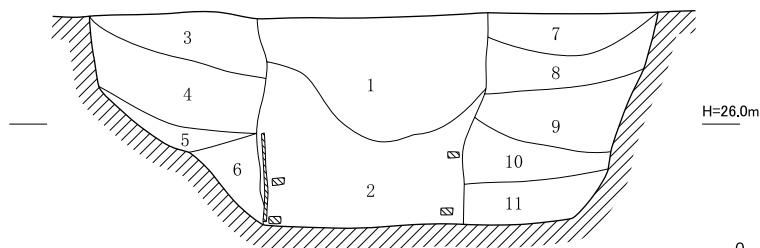
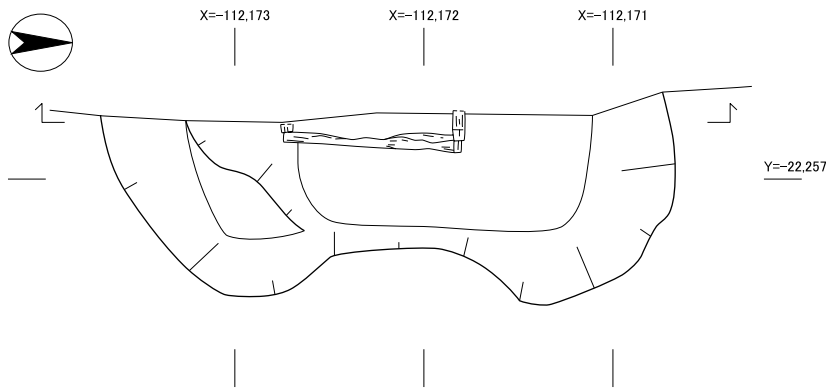


井戸422



- 1 10YR2/2黒褐色砂泥 やや粘質
- 2 2.5Y7/6明黄褐色粗砂 φ~3cm礫多量

井戸4

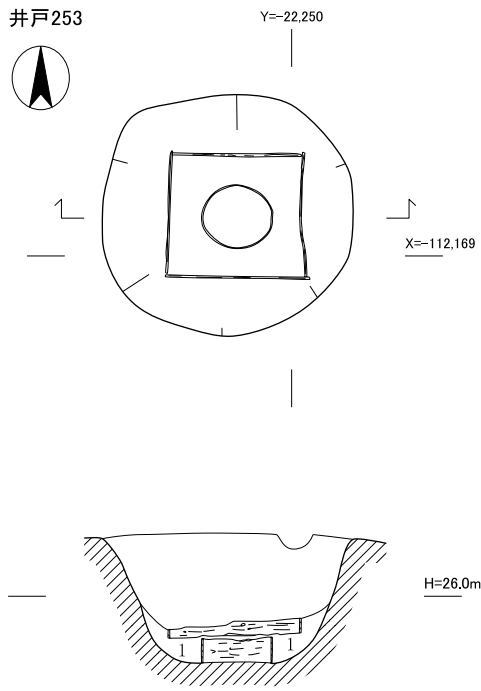


- 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 φ~10cm礫極めて多量
- 2 2.5Y2/1黒色~3/1黒褐色砂泥
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 4 2.5Y3/1黒褐色砂泥 粗砂少量
- 5 2.5Y3/1黒褐色泥砂
- 6 7.5YR3/4暗褐色粗砂
- 7 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 8 2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 9 2.5Y3/1黒褐色砂泥 粗砂混
- 10 7.5YR3/4暗褐色粗砂
- 11 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫

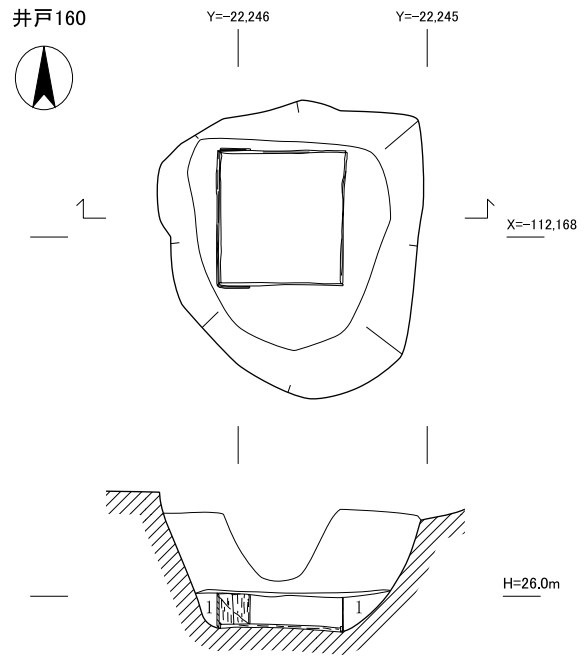


井戸4・422実測図 (1:40)

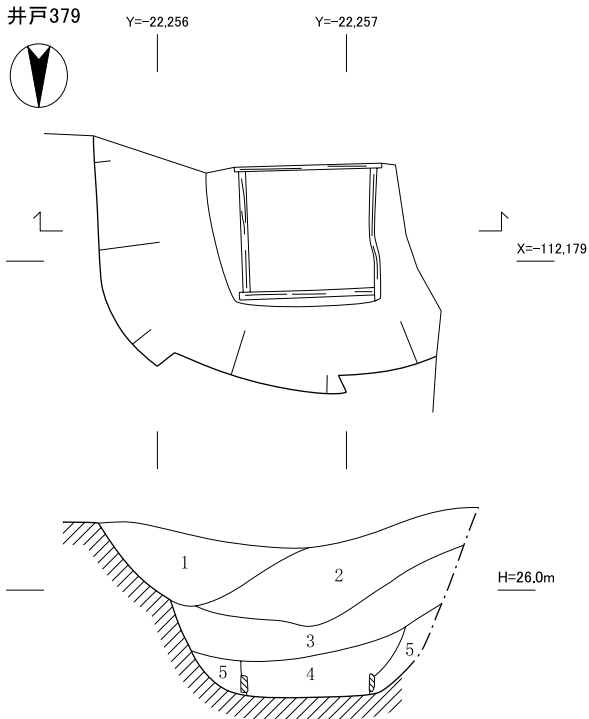
図版6
遺構



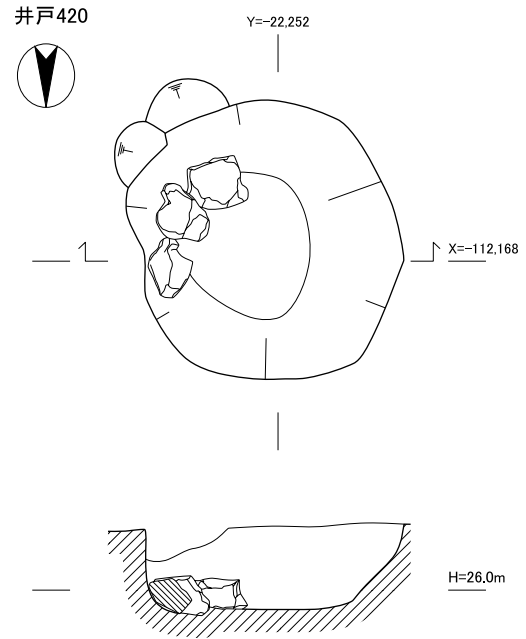
1 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂礫 泥砂少量 φ~5cm礫多量

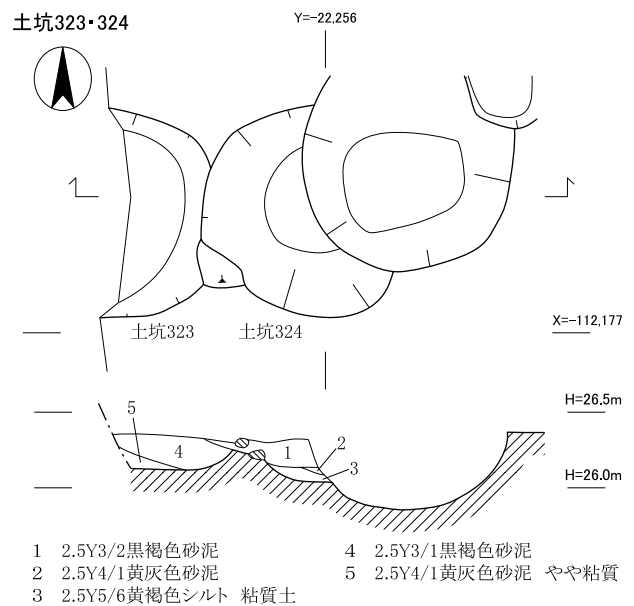
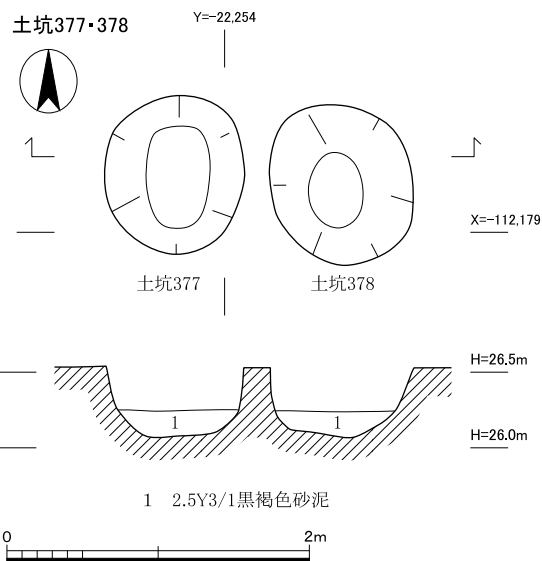
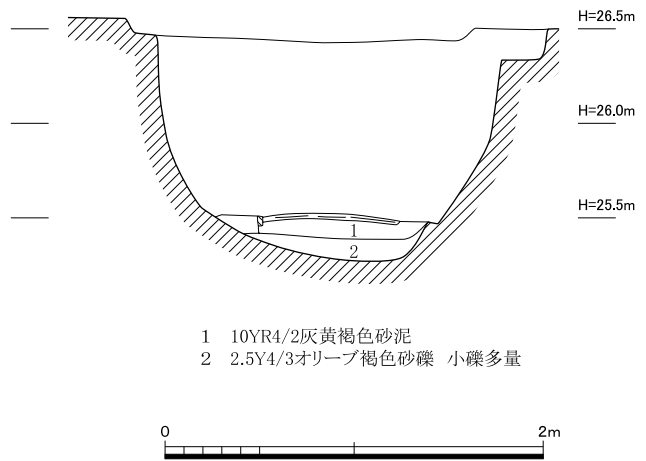
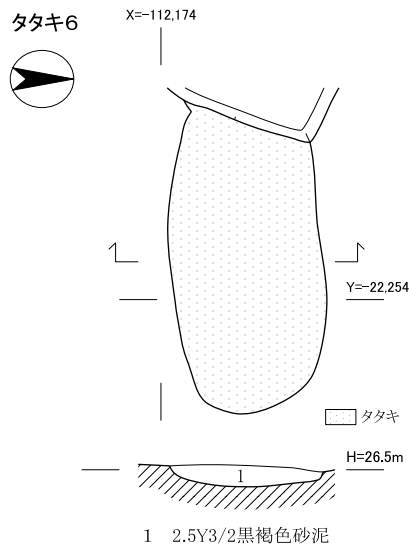
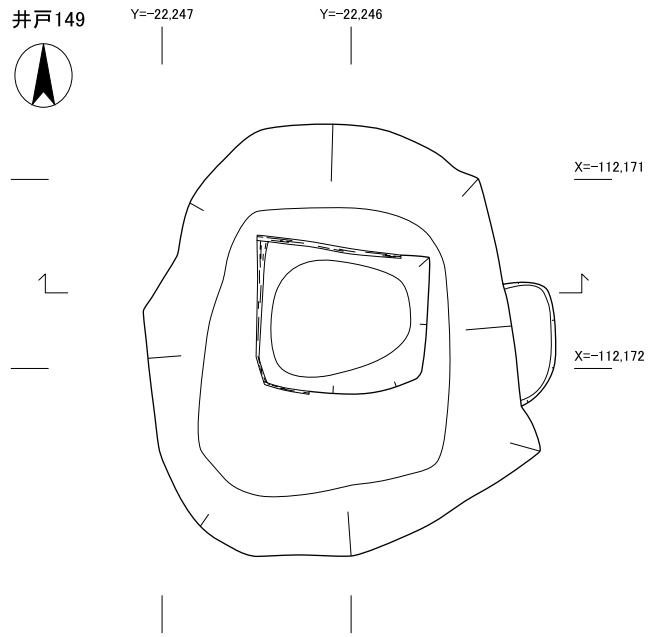
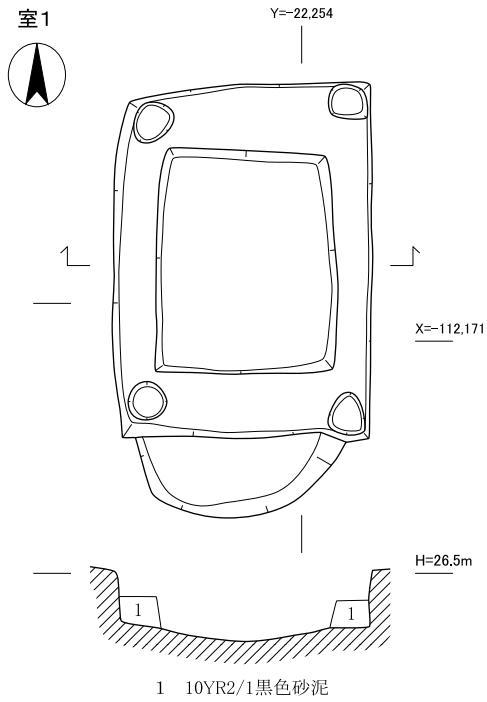


1 2.5Y3/1黒褐色砂泥



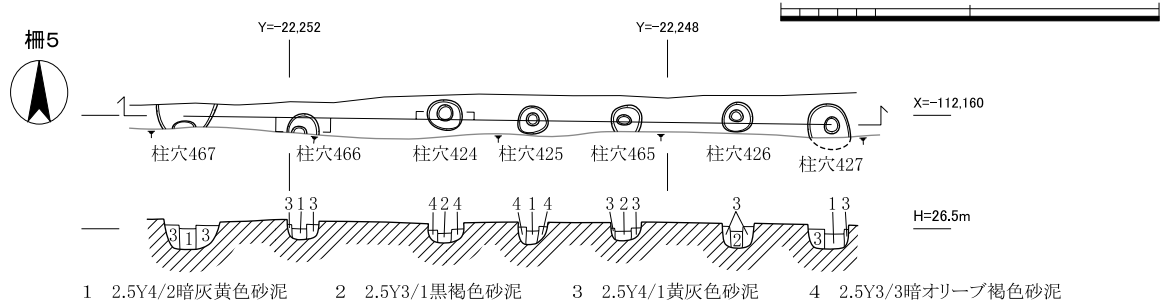
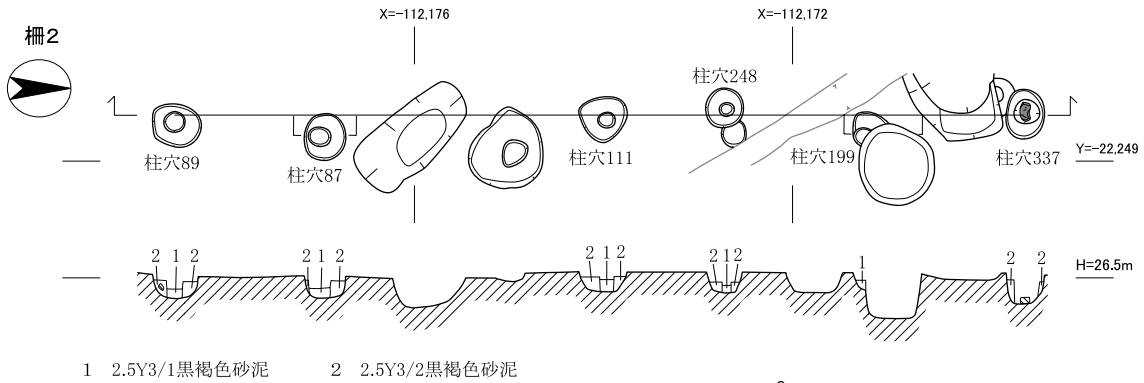
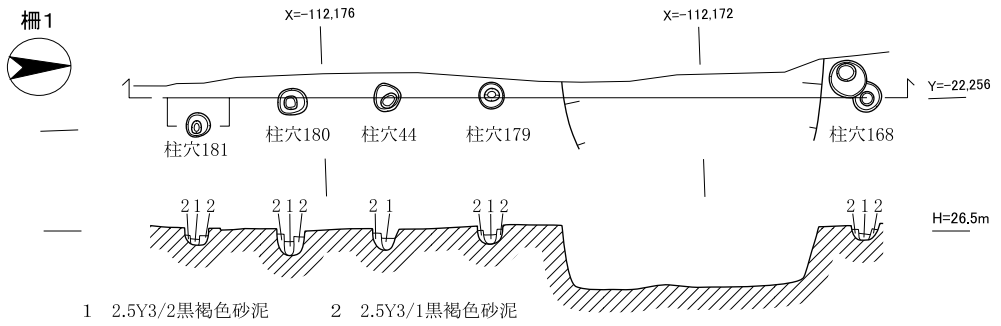
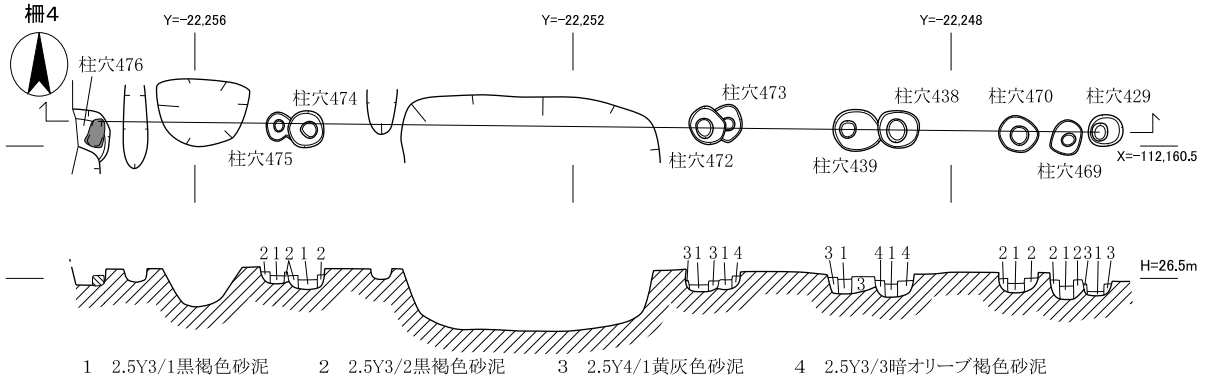
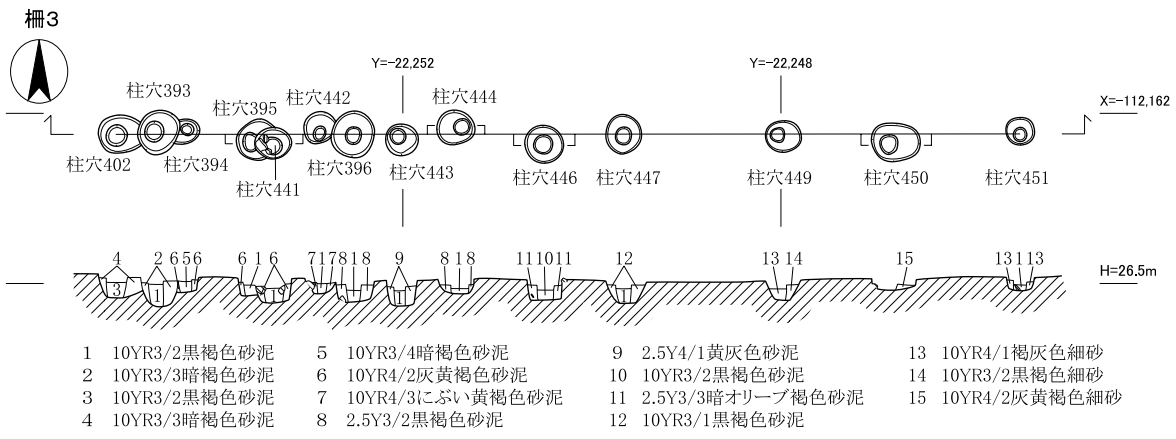
- 1 10YR4/3こぶい黄褐色砂泥 φ~10cm礫多量
- 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 3 2.5Y3/1黒褐色砂泥砂・粗砂 φ~10cm礫多量
- 4 2.5Y3/2黒褐色粗砂礫 φ~15cm礫多量
- 5 2.5Y3/2黒褐色粗砂





室1、タタキ6、井戸149、土坑323・324・377・378実測図(1:50、井戸149のみ1:40)

図版 8
遺構



柵1～5実測図 (1:80)



1 調査区北部 第2面全景（西から）



2 調査区南部 第2面全景（西から）



1 井戸488 (南から)



2 井戸479 (北から)



3 湿地477 (南西から)



1 調査区北部 第1面全景（西から）



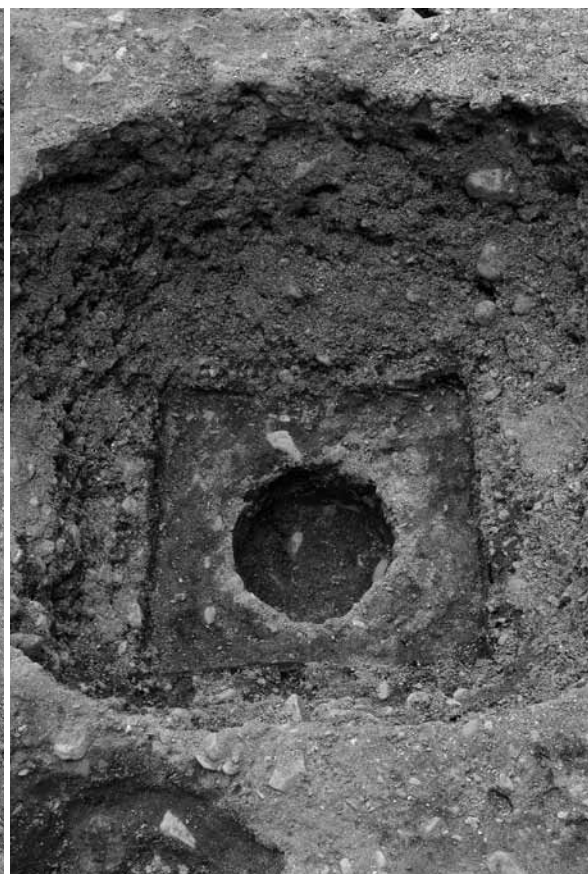
2 調査区南部 第1面全景（西から）



1 井戸458 (西から)



2 井戸91 (北から)



3 井戸253 (北から)



1 井戸160 (北から)



2 井戸420 (北から)



3 井戸379 (東から)



4 土坑400遺物出土状況 (南東から)



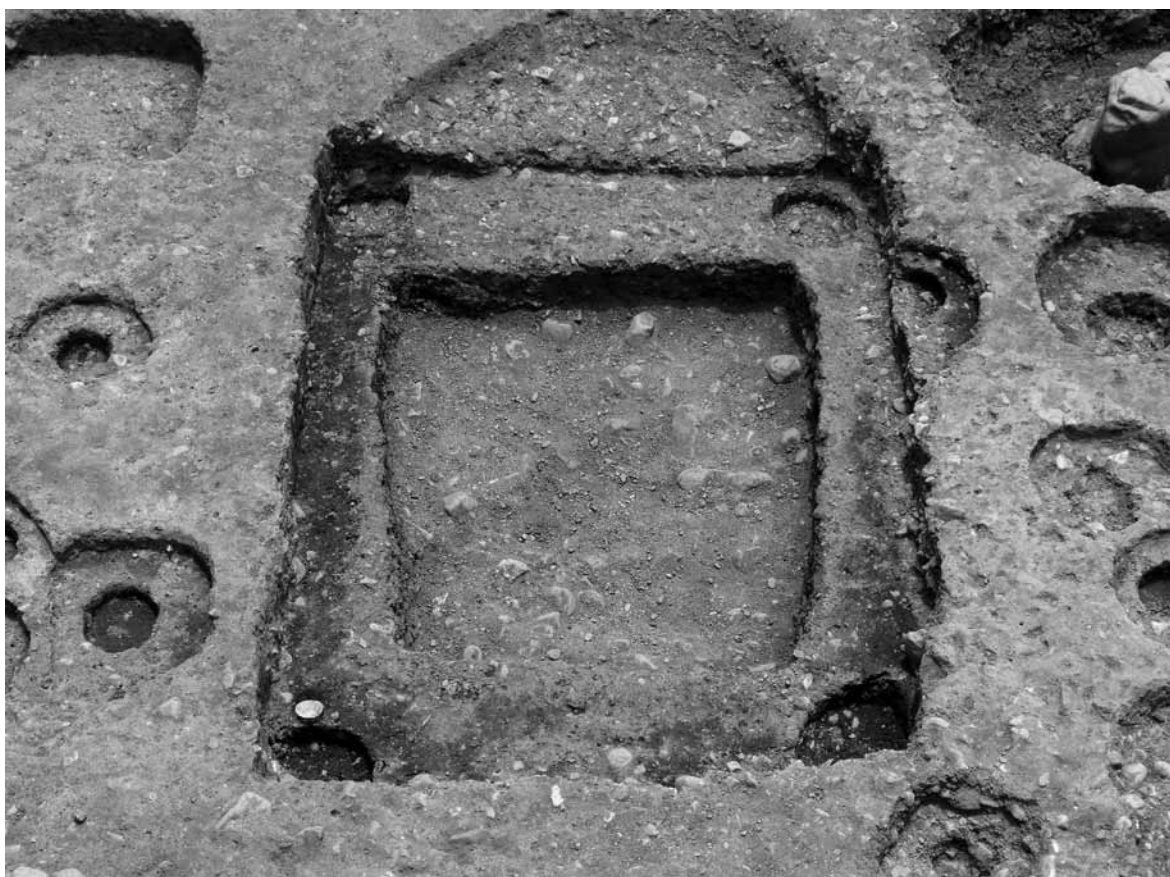
1 建物1 (東から)



2 建物1 柱穴224 (東から)



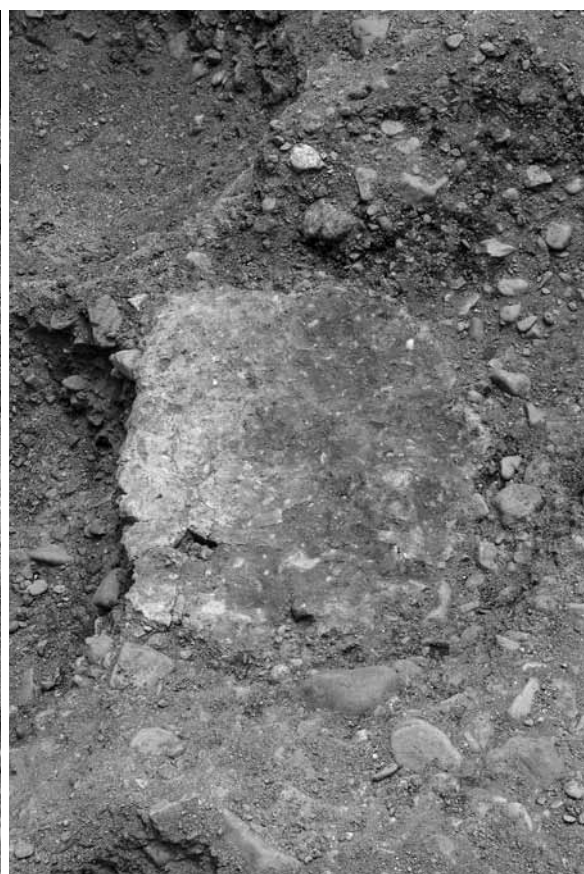
3 建物1 柱穴47 (北から)



1 室1 (北から)



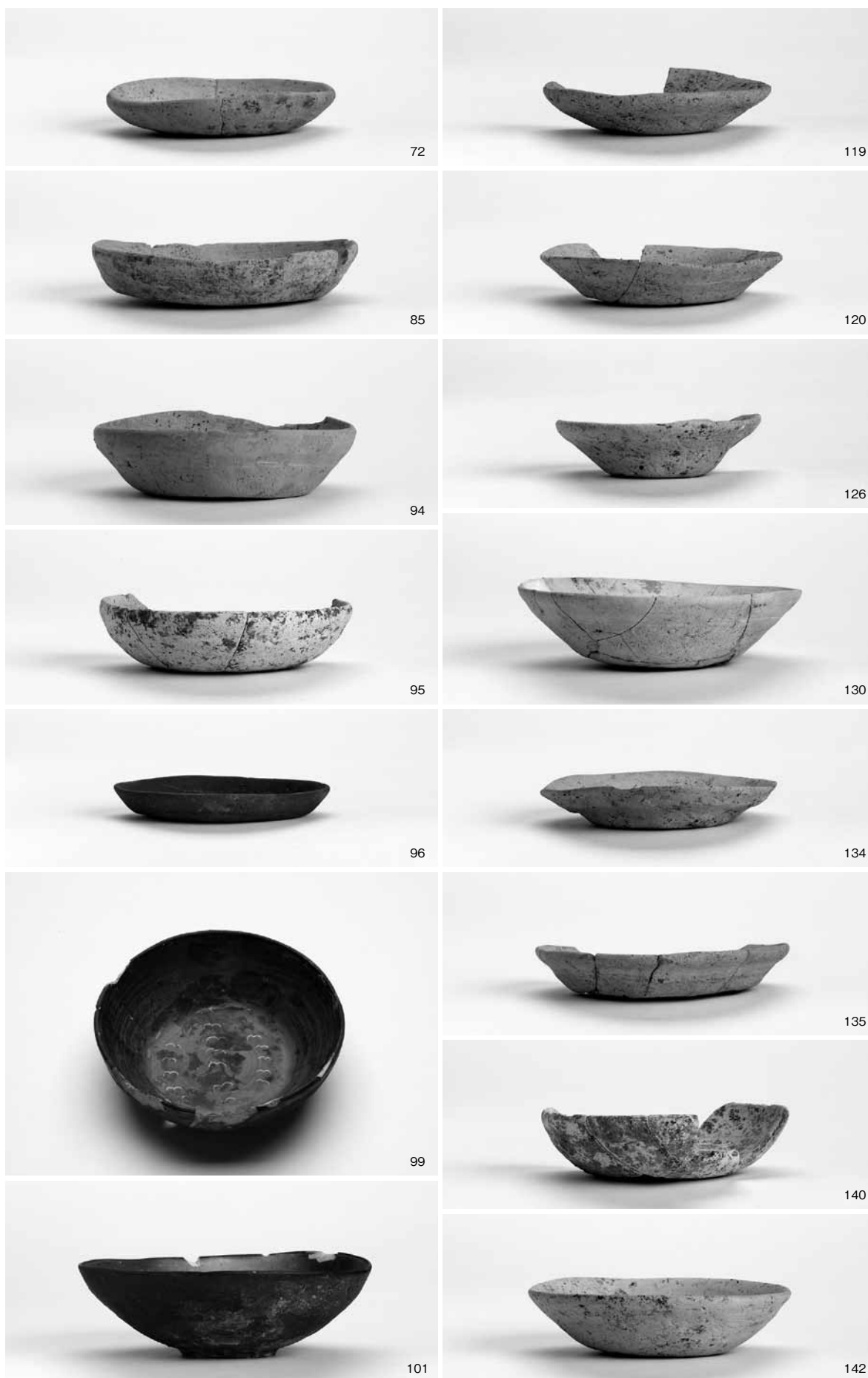
2 土坑377・378 (東から)



3 土坑324 (北から)



湿地477、井戸422・458・488、土坑400出土土器



土坑392、室1、井戸399出土土器

報 告 書 抄 録

| ふりがな | へいあんきょうさきょうはちじょうさんぼういっちょうあと・ひがしほんがんにまえこぼぐん | | | | | | | |
|---|---|-------------------|-----------------------------|--|--------------------|--|------|-------------|
| 書名 | 平安京左京八条三坊一町跡・東本願寺前古墓群 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2019-10 | | | | | | | |
| 編著者名 | 鈴木康高 | | | | | | | |
| 編集機関 | 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 | | | | | | | |
| 発行所 | 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2020年4月30日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| へいあんきょうあと 平安京跡 ひがしほんがんにまえこぼぐん 東本願寺前古墓群 | きょうとししちぎょうく 京都市下京区 きづやばしどおりしんまち 木津屋橋通新町 にしいるひがししおこうじちやう 西入東塩小路町 601ほか | 26100 | 1 | 34度 59分 19秒 | 135度 45分 23秒 | 2019年6月 3日～2019 年8月28日 | 294㎡ | ホテル 建設工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 平安京跡 東本願寺前古墓群 | 都城跡 墓跡 | 平安時代中期 以前 | 井戸、溝、湿地 | 土師器、黒色土器、須 恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器、輸入陶磁器 | | 平安時代から室町 時代にかけての一 町中心部における 宅地利用の様相が 明らかになった。 鎌倉時代から室町 時代にかけての建 物を確認した。 鎌倉時代の井戸か ら墨書土器が出土 した。 | | |
| | | 平安時代後期 ～鎌倉時代中期 | 井戸、柵、溝、土 坑、柱穴 | 土師器、須恵器、白色 土器、瓦器、焼締陶器、 施釉陶器、輸入陶磁器、 瓦、土製品、石製品、 金属製品 | | | | |
| | | 鎌倉時代後期 ～室町時代前期 | 建物、室、タタキ、 井戸、柵、土坑、 柱穴 | 土師器、須恵器、瓦器、 焼締陶器、施釉陶器、 輸入陶磁器、瓦、土製 品、石製品、金属製品 | | | | |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-10

平安京左京八条三坊一町跡・
東本願寺前古墓群

発行日 2020年4月30日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961